



平成30年度

のじおく文芸賞

2018

Literary Works

発刊にあたって

「すべての人民とすべての国とが達成すべき共通の基準」として世界人権宣言が採択されて、今年は七十周年にあたります。兵庫県では、すべての県民がお互いを認め合いながら共に生きる「共生社会」の実現を目指して、様々な取り組みを進めてまいりました。

しかし、昨今の少子・高齢化や情報化の進展、人々の価値観や生き方の多様化に伴い人権課題もますます多岐にわたり、複雑化しています。子どもや高齢者への虐待、いじめ、体罰、セクハラやパワハラ、インターネットを悪用した差別事案など人権侵害は後を絶ちません。

兵庫県では、私たち一人ひとりが、お互いの人権を尊重する感性を育み、日常生活の中で人権尊重を自然に態度や行動として表すことが文化として定着している社会を目指し、「人権文化をすすめる県民運動」を市町とともに推進しています。「のじぎく文芸賞」はその取り組みの一つであり、県民の皆さん一人ひとりが主体的に人権について考え、作品を通して豊かな人権感覚を身につけていただくため人権問題に関する文芸作品の募集を行っており、今年で第二十五回を迎えました。人の優しさや思いやり、支え合うことのすばらしさ、生命や人権の尊さ、大切さなどが綴られた一、五八四編もの作品が寄せられ、応募総数はこの二十五年間で一九、〇一九編になります。優秀な作品については、ひょうご人権ジャーナル『きずな』やラジオ番組での人権啓発に活用してまいります。作品づくりを通して育まれた人権尊重の心が県民の皆さんに広く発信されることによって、人権文化の定着がいつそう図られることを期待しています。

本年度も応募作品の中から、最優秀賞四編、優秀賞八編を収録いたしました。人権啓発や研修の場でぜひご活用いただき、日常生活での実践につなげていただくことを願っています。

また、多数の作品について、慎重かつ厳正な審査をしていただきました審査委員の皆様には、心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、今後とも「のじぎく文芸賞」をはじめ様々な啓発事業などを実施し、県民のみならず人権意識の高揚や人権文化の創造につとめてまいります所存ですので、どうぞよろしくお願いいたします。

平成三十年十二月

兵 庫 県

公益財団法人兵庫県人権啓発協会

平成30年度 人権問題文芸作品「のじぎく文芸賞」受賞者

氏名	作品名	部門(部)
〈最優秀賞〉		
大新 健一郎	自由を僕らに	小説(一般)
浜田 加代子	今から一步	随想(一般)
岩井 いづみ	土手の道	詩(一般)
黒田 紀子	ひきざんじやない	創作童話(一般)
〈優秀賞〉		
吉植 芙美子	お日はちりちり	小説(一般)
鈴木 優真	青空クレヨン	小説(学齡児童生徒)
村沢 綾乃	私の居場所と大切な人	随想(一般)
北垣 望咲	伝えることの大切さ	随想(学齡児童生徒)
松ぼっくりん	野路菊と飛行機雲	詩(一般)
武田 奈々	こんどは だれかが	詩(学齡児童生徒)
石川 純子	竹さんは今夜も	創作童話(一般)
川畑 実生	白い町	創作童話(学齡児童生徒)

〈佳作〉

小倉彩乃
志奈
阿部忠彦
世良紗也果
熊中優月
塚口佳子
稲垣奏太
東条幸一
本木晋平
長濱真奈美
藤田文
大恵やすよ
いよくけいこ
水谷生子

まだ見ぬ君よ

白鳥の子

そんな学校を作りたい

いま、心をひとつに

じぶんらしくていいのにな

七十七歳、今日も想い果てしなく

道徳が教科化されたわけ

家族に幸あれ

質問

子供のような大人になりたい

ピンちゃんとカタツムリ

パスのなか

ひろくんのうた

秋祭り

小説（一般）

小説（一般）

小説（一般）

小説（学齡児童生徒）

随想（学齡児童生徒）

随想（一般）

随想（学齡児童生徒）

随想（一般）

詩（一般）

詩（学齡児童生徒）

創作童話（一般）

創作童話（一般）

創作童話（一般）

創作童話（一般）

目次

【総評】	審査委員長	林	芳樹	1
【部門別審査講評】	各審査委員	2
【最優秀賞・優秀賞作品】
《最優秀賞》
〈小説部門〉	自由を僕らに	大新	健一郎	21
〈随想部門〉	今から一歩	浜田	加代子	37
〈詩 部門〉	土手の道	岩井	いづみ	42
〈創作童話部門〉	ひきざんじやない	黒田	紀子	44

《優秀賞》

〈小説部門〉

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

お日はちりちり	吉植 芙美子	47
青空クレヨン	鈴木 優真	61

〈随想部門〉

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

私の居場所と大切な人	村 沢 綾 乃	77
伝えることの大切さ	北 垣 望 咲	79

〈詩 部門〉

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

野路菊と飛行機雲	松ぼっくりりん	81
こんどは だれかが	武 田 奈 々	82

〈創作童話部門〉

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

竹さんは今夜も	石 川 純 子	83
白い町	川 畑 実 生	89

◆平成30年度応募作品の内訳

合計	学齡児童生徒 (中学生以下)	一般 (高校生以上)	部
			部門
20	7	13	小説
1,201	1,165	36	随想
345	316	29	詩
18	4	14	創作童話
1,584	1,492	92	応募総数

◆平成30年度審査委員

林 芳樹(総括)
時里 二郎(詩)

野元 正(小説)
尾崎 美紀(創作童話)

三浦 暁子(随想)

総評

審査委員長 林 芳樹

今回もたくさんのお応募がありました。そして珠玉のような言葉と何度も出合いました。たとえば、こんな言葉、「生きるに値しない命など絶対ない」。随想部門の最優秀賞受賞作にあります。

そういうえば…と、新聞紙上で目にした同じ言葉がいくつかよみがえりました。

長編アニメに取り組んだ宮崎駿監督が長い活動を振り返って「子どもたちに、この世は生きるに値するんだと伝えるのが仕事の根幹になればいけない」。こんな思いで数々の名作をつくってきたのかと、感じ入りました。映画監督の山田洋次さんは「学校」シリーズについてこう話します。「茶髪やガングロの子も懸命に問い掛けています。この社会は生きるに値するのか、と。そう思えば、みんながいとおいなる」

尼崎JR脱線事故で大けがを負い、家族もつらい日々を送った男性が、シンポジウムで語った一言も心に残りました。「大変苦しい思いでしたが、人生は生きるに値する」。みなさん、いつか笑顔に、と。阪神・淡路大震災で亡くなった兄のランドセルを背負い、弟が通学する記事がありました。『にいちちゃんのランドセル』という本になりました。そのお父さんがこう話します。「短い生涯でも、その人生には意味があり、人と人とのつながりを生む。人生は生きるに値する」

この冊子に掲載することになった作品を再読しながら、ふと思いました。テーマはとても多様になってきました。主題は異なっても、底にあるものは同じように感じたのです。それは「生きるに値する社会を」という願い。

応募作を審査委員のみなさんがどう受け止め、評価したのか、それぞれの講評をお読み下さい。やさしいまなざしで、作品にこめられた思いを丁寧に読み取っています。

疲れたとき、壁にぶつかったとき、心が重苦しくなったとき、この冊子をちょっとめくってください。

部門別審査講評

【小説部門】

審査委員 野元 正

《審査総評》

今年度の小説部門の応募総数は、20編であった。その内訳は一般の部13編、学齡児童生徒の部7編だった。応募総数28編（一般17編、学齡児童生徒11編）の29年度と比較すると、人権問題というテーマのむずかしさであろうか、大分減少している。

各作品のテーマは、昨年度同様、真正面から人権問題に取り組むというより、作品の中にさりげなく「人の優しさ」「思いやり」「心豊かな社会づくり」「生命や人権の尊さ、大切さ」などテーマを込め、読み終わったあとに作者の言いたいことが浮かび上がってくるものが多くなったように思う。それは、「小説」に限らずすべての「文学」に言えることかもしれないが、作品の熟度が年ごとに上がっているのではないかと、思えてならない。

「小説」は既成概念や常識に対抗する面もあるので、「小説」で「人権」の大切さを現代社会に伝えることはとてもむずかしいが、今年度も作品の中に自然と何かを感じさせ、将来に光が見える作品を選んだ。

〈最優秀賞〉

作品名「自由を僕らに」 大新 健一郎

交通事故で車いす生活の大輝と、言葉や習慣や食べ物なども違うネパールから来た外国人ナラヤンは、互いにハンデをかばい合いながら、大輝は25m泳げるようになることを、ナラヤンは勉強と

バレーボールに励むことを親友として約束する。しかし、ナラヤンはクラスメートにいじめられ不登校になってしまう。クラスで話し合いをした結果、全員でナラヤンを訪問するが、不登校は解決しない。そこで大輝はナラヤンへ手紙を出す。25m水泳に挑戦するから観にきてほしい、と。ネタばれになるから25m泳げたかは書けないが、ナラヤンは来てくれる。そしてクラスにナラヤンを見守る体制ができる。大輝とナラヤンの国境を越えた友情、クラスの話し合い、大輝の思いやり、いじめっ子の反省など、将来に光明を感じる優れた作品だと思う。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「お日はちりちり」 吉植 芙美子

酒の仕込み歌なのか、表題「お日はちりちり」の労働歌（？）が不思議な雰囲気醸し出す造り酒屋の暗い酒蔵に、酒屋の少女ヤエちゃんや、その兄で幼いときに顔に大やけどを負った一太郎や、何か魔物が住んでいそうだと想像を膨らみますヤエちゃんの友で主人公シノ、そして蔵人たちの思いやりがいっぱい詰まった民話的物語だ。特にシノとヤエが入った酒桶が回転して止まらなくなり、シノのお下げ髪がちぎれそうになるのを、蔵に住んでいるという妖怪ならぬ「くらんぼ」が下敷きになって止める場面や一太郎の顔の火傷の原因になったおこげの場面の迫力ある描写は巧みだ。また女性の入蔵は嫌う、怖い一太郎を分け隔てなく「お父さん」としてキンモクセイのお茶などのまごに誘うシーンも感動的だ。

古い因習や男女差別や醜さとは何かなどへのアンチテーゼの効いた秀作だと思う。

〈優秀賞〉（学齡児童生徒の部）

作品名「青空クレヨン」 鈴木 優真

朝ドラの「半分、青い。」を思い起こさせる表題だが、僕、17歳の「桜井もも」は男子生徒だ。事情があつて父母は男の子に女の子の名前を付けたのだ。彼は部長が同じ歳の幼なじみの「緑」とふたりだけの「美術部」に属している。僕は毎日歩く桜が咲く川沿いの道で遙風白に出会う。そして好きな場所を聞くと、「屋上―見える景色」だと言い、不思議なことに他のことも一致した。

白は何者か？ これもネタばれになるから書かないが、僕は学校でいじめにあう。身体はあざだらけ、心は傷だらけだった。回りは誰も皆傍観者ばかりだ。そんなとき、理解者緑が階段から落ちて大怪我をしてしまう。身近な幼なじみの不幸はいじめよりも心を傷つける。そんな僕を白は励ましてくれた。「人は人のために生きている」「僕は人の心に平等の天秤をつくることができる」など、今、いじめにあつても生きるこの大切さを自覚し、強く生きていくことの価値を伝える佳篇だ。

〈佳作〉

作品名「まだ見ぬ君よ」 小倉 彩乃

結婚して6年間、子どもが生まれなかった夫婦はあきらめかけていたとき、子どもを授かった。そのとき、リサは女性として仕事の上でも課長・管理職として頑張っていた。夫も喜んでくれた。新しい命を授かった喜びの次に、「出生前検査」のを知り、30歳後半の「高齢出産」でもあり、もしも、を考えて悩む。

結局、産まないためでなく、産むための検査として、この検査を捉えることで克服していく夫婦を描いている。

生命の尊さ、人生とは？ 人ごとでない身につまされる問題を内包した意義深い作品だ。

作品名「白鳥の子」 志 奈

35歳の祥子は、元バレエダンサーで現在はバレエ団の女性照明係をしている。彼女は公演先の野外劇場で『瀨死の白鳥』を必死で踊る少年ダンサーと出会う。やがてこの2人は互いにバイセクシュアルと知る。バレエでは作品によって、男役、女役はほぼ決められているが、どちらとも定められていない『瀨死の白鳥』を少年は踊りたがる。

少年の父はゲイで、その新しい恋人は、祥子の元彼という複雑な人間模様の中で男とは何か？女とは何か？一般的な性の概念を超えた物語だ。ややバレエの専門用語が多く、分かりにくいところもあるが、それを差し引いても読み応えがあった。

声高にLGBT問題を取り上げてはいないが、多岐に渡る問題を含んだ作品だと思う。

作品名「そんな学校をつくりたい」 阿部 忠彦

中学生・晋也の弟・充が発達障害のため、どうして良いか分からない彼の母が、躰と称して弟を折檻することに悩んだ慎也は、学校の直子先生に相談する。

直子はすぐ行動に移し、家庭訪問によるヒアリングや渋る校長や教頭はじめ教師の説得に努める。朝礼で話す機会を得た晋也は、次春に入学してくる充が発達障害であることを明かし、いじめなどしないよう依頼した。

発達障害といっても個人個人、それぞれ対応は違うが、よく研究し小説の充に対して、各生徒達に適切な対応を提案している。

この作品は手慣れの書き手が書いた好編だと思う。

作品名「いま、心をひとつに」 世良 紗也果

サククスやトロンボーンなどそれぞれの楽器に愛着を持ち、バラバラでまとまりに欠けていた吹奏楽部のメンバーが、本当はサククスが吹きたいのにトロンボーンの担当にされるなど、それぞれの確執や葛藤の中で次第に互いの心を理解し合うようになる。

そしていま、吹奏楽部はまとまり心を一つにして、地域大会に挑み、念願の「金賞」を獲得し、さらに県大会への出場が決まる。表題の「いま、心をひとつに」は人権問題解決の重要な一箇条であり、いじめも解消し、すべてが好転する兆しが見える佳篇だ。

《審査総評》

本年度、随想部門への応募作品は1201作品であった。そのうち、一般の部は36作品であり、児童生徒の部は1165作品であった。昨年に比べ減っており、とくに一般の部の応募数の減少が大きいことが気にかかっている。

高齢の方々が、あとに続く世代に言い残しておきたいことはたくさんあるはずだ。「のじぎく文芸賞」を通じて、若い方達へメッセージを伝えていただきたいと思う。口頭ではお説教になりがちな教えも、活字にすることによって、考えが整頓され、思いがはっきりとした形で伝わり、若者達の心にしみ通るはずだ。

学齢児童の部も、自分で伝えたいと願うことを手紙のように綴っているものが多くあり、感心した。

〈最優秀賞〉

作品名「今から一步」 浜田 加代子

アスペルガー症候群という言葉聞いたことがあるだろうか？ 私は不勉強で、発達障害のひとつだと知ってはいたが、具体的に何がどうなっているのか、知らないまま、今日まで生きてしまった。

しかし、作者の場合、「なんとなく知っている」ではすまされない重要事項だ。

可愛い息子が、アスペルガー症候群の診断を受けているからだ。知的障害のない自閉症とも呼ばれるこの症状は、先天的に脳の機能が他の人と違うという。そのために引き起こされる生きづらさ。周囲に騒動を巻き起こす不可解な行動。母親として苦しみなながらも、息子を理解しようとする姿が

克明に描かれていて、胸を打つ。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「私の居場所と大切な人」 村沢 綾乃

もう死んでしまいたい。そう思っていた作者。本当に実行に移してしまおうとしたことさえあったようだ。けれども、そんな彼女に救いの手がさしのべられた。

福祉センターの職員の笑顔と「またおいで」の言葉が、自分で自分を傷つけたくなる作者に「待った」をかけたのだ。その言葉は、とくに専門的ではなく難しい理論で武装されたものではない。

もちろん、彼らは専門家としての知識はもっているだろうが、かける言葉は簡単明瞭だ。「僕は味方だから」、「いつでも話聞くから」という風に。その言葉に励まされ、作者は立ち直っていく。そして、自分もそうになりたい、人の心に添えるようになりたいと思うまでに成長していく。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）

作品名「伝えることの大切さ」 北垣 望咲

最近、コミュニケーションがうまくとれない人が増えているという話を耳にする。しかし、実はそれほど深刻な状況ではないと、私は樂觀している。確かに、友だち同士、並んで座っているながら、黙って携帯をそれぞれにのぞき込んでいるのを見ると、せっかく目の前に話すべき人がいるのだから、その人とコミュニケーションをとった方がいいのにと、思ったりはする。「伝えることの大切さ」の作者も、母親の教えから「明日、大切な人が死ぬかもしれない。想いを伝えなきゃ」と、気づいたという。今も昔も、わかっている人はちゃんとわかっていると、頼もしく思う。

〈佳作〉

作品名「自分らしくていいのにな」 熊中 優月

小学校2年生でもこれだけのことを思い、文章にできるのだと、嬉しくなった。年齢に関係なく、鋭い観察眼というものを備えた人間が多いということだろう。

作者は色黒であることをからかわれ、嫌な気持ちになっている。ふざけているだけだとわかってはいても、言われたくないことはある。そもそも肌の色は世界中で違う。からかったところで、なおせるはずもなく、なおす必要もない。肌の色を自分らしくていいと思うようになるまでの道のりは、作者を成長させる苦難の道でもあったのだろう。

作品名「七十七歳、今日も想い果てしなく」 塚口 佳子

若くしてなくなつた顔見知りの男性。オートバイ店を営みながら、認知症の父親の面倒を見る孝行息子だ。なぜそんな良い人が、と、誰もが思う。

自身もアルツハイマー病のご主人を見舞いながら働いている作者にとって、他人事とは思えない深刻な事態だ。

看病は病人も大変だが、する側も、身体と心を疲労させ、時には、命をも奪う結果になる。それでも、作者は夫を見舞う。たとえ自分が妻であるとわかってもらえなくても、毎日、通う。会うこと、それが互いの幸福になるとしんじるからだ。

長きにわたる介護はつらい。しかし、そこに一瞬のまばゆいばかりの光があるのだろう。

作品名「道徳が教科化されたわけ」 稲垣 奏太

今年から、通知表に「道徳」欄が増えたという。

何をいまさらと思う人もいるかもしれない。しかし、いじめや、自殺の問題が起る毎日だからこそ、かつては重要視されていた「道徳」の精神を取り戻すべきだという判断がなされたのかもしれない。

作者は鋭い感性の持ち主で、道徳の授業での経験をもとに、自分なりの考えを展開していく。

「道徳は算数とちがって正しい答えをさがすのではなく、いろいろな答えがあつていいのです」というのである。まさにその通りだが、それだけに評価が難しい教科となるだろう。

作品名「家族に幸あれ」 東条 幸一

心を病んでしまった母親を持つ作者。

その大変さ、苦しさ、そして、重くのしかかる現実。

とくに、どうしてもとめられない性癖が、家族を苦しめる。

作者は振り絞るようにして声をあげる。「絶対に家族だけで抱え込まないで。相談窓口を探してほしい。そこでの結果が思わしくなかったとしても、あきらめないでほしい。必ず次がある」

この言葉を胸に作者は頑張ってきたのだろう。重く突き刺さる言葉である。

《審査総評》

ドローンを使ったカメラワークが取り入れられるようになってから、山歩きのテレビ番組に心ひかれるようになりました。登山者が頂上にたどりついたとき、不意に画面が切り替わって、ふわっとカメラが上昇しながら、登山者を取り巻く辺りの全景がゆっくりと映し出されていくシーン。ドローンによる撮影ならではの迫力と、その場の臨場感に加えて、通常の人の視線では捉えることのできない俯瞰的なカメラワークが、登山者の立っているところがこんなにも心震えるような大自然のなかにいるのだということを教えてくれます。

おそらく、人権をテーマにした詩（言葉）の表現もまた、このドローンのようなはたらきが求められていると思います。考えさせられる出来事や問題が起こったとき、それが社会のなかで、どんな意味を持つのかという視点や、ふだんの生活では隠れて見えないものを見つめようとすると心のはたらきは、《言葉》があってはじめて身につくものなのです。その一つが、俯瞰的な眼差しです。言葉を使うと、日常の視点から距離を置いて、自分と、自分をとりまく社会とを、同時にその両方を見つめることができます。この言葉のはたらきを《想像力》と言い変えることもできます。

自分の実際の体験を手がかりに、この《想像力》のはたらきを使って、ドローンのように、俯瞰的な眼差し——日常生活とは少し違う視点で、それを見つめていると、今まで見えてこなかった社会のようすや問題が浮かび上がってきます。ここに選ばれた作品は、そのような言葉の力が存分に生かされています。

〈最優秀賞〉

作品名「土手の道」

岩井 いづみ

右の手足が不自由で、歩くのが困難な「娘さん」の先を歩くお母さん。懸命に歩いている娘の手を引つ張つて駅に連れて行こうともしません。ただ「早う来おい」と呼びかける。もちろん、作者には、お母さんが娘さんの手を引かない理由はわかっています。しかし、このままそれを見過ごしてしまうのもしのびない。

詩は、桜の咲く土手の道から始まり、日差しの焼け付く夏、桜紅葉の秋へと進んでいく。つまり、そんな思いを胸にしながら、ずっと作者はこの二人の親子を見守っているのです。そして木枯らしの吹く冬の日に、その日も遙か遠くにいるお母さんと離れて歩いてきた娘さんが、風にあおられて転んでしまいます。助けようと思ったその時、何人もの人が声をかけて、娘さんを助け起こしたというのです。自分だけではなかった。自分と同じようにこの親子を見守っている人たちがいたというのです。

心うたれる話ですが、身体が不自由なこの娘さんの存在を通して、地域社会が結びついているということに気づかされます。社会的な弱者と言われることの多い障害者ですが、社会の絆とか、人々の結びつきの、強い核になることを、この作品はわたしたちに教えてくれているように思います。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「野路菊と飛行機雲」

松ぼっくりりん

電動車椅子に乗り換えることによって、今まで息子が自分の意志を表に出すことを我慢し、自分の思いを表現するのをどれほどこらえていたのかと、父である作者は気づきます。この作品からわたしたちが読み取らないといけないのは、車椅子で生活している人たちが、わたしたちがあたりま

えと感じていることを、どれほど制限されているかということ。二年前の詩の応募作品に、車椅子で生活している人が、アメリカに行つて、そこで「当たり前に対等な価値ある人間としてヘルプが提供される」という空気を肌感じて、日本の社会にはない感覚がそこにあつたといった内容の作品がありました。車椅子で生活している人が、無意識のうちに車椅子を押しつけている人のことを考えて、自分の意志を制限してしまうのは「当たり前」のことだと思い、押している人も、そのことを「当たり前のこと」ととらえているとしたら、それは「対等な価値ある人間としてのヘルプ」ではないと思います。電動車椅子にするかしないかの問題ではなく、人が押す車椅子で生活する人の場合も、電動車椅子に乗つて、この人が感じている思いと同じ思いを持つのでなければなりません。

〈優秀賞〉(学齡児童生徒の部)

作品名「こんどは だれかが」

武田 奈々

おばあさんに席をゆずるといふ、よくある話題ですが、この詩のよいところは、そのおばあさんを、「わたしのおばあちゃんみたいに見えた」と感じているところ。見知らないおばあさんを、自分のおばあちゃんに置き換えることは、何気ないように見えて、とても大切な心のはたらきなのです。それは一言で言う《想像力》ということになりますが、他人の身を自分の身に置き換えることができる人は、人の痛みやつらさを自分のものとして感じることができます。実はこの《想像力》は、言葉があるからこそ人にも伝えられるのです。「おばあさんのうしろすがたが、小さく見えた」という表現から、作者の胸の苦しさがつらさがよく伝わってきます。

最終連もいいです。「知らないだけれが、わたしのおばあちゃんやおじいちゃんにせきをゆずつてくれたらうれしいなあ」。ここにも自分をほかの人に移し替えて考えようとしています。このよ

うな他者と自分との取り替えが、人と人とを結びつける力の元になるように思います。

〈佳作〉（一般の部）

作品名「質問」 本木 晋平

人について知りたいと思うときのことを改めて考えてみると、どこに住んで何をしている人なのかといったことをまず尋ねます。とくに、その人が外国人の場合はこの作品に列挙されているようなことをまず尋ねがちです。国籍や宗教や家族といった、その人の表面や外側についてまず知りたいたいというのは、順序から言って当然のことのように思います。実はここに大きな落とし穴があるようです。そうやって表層（表面や外側）を知ることによって、わたしたちは結果的にその人を、かなり分厚い社会的な偏見のまなざしで見ていることに気づきます。例えば、それぞれの人種や国籍について、社会が作り上げたイメージ、職業についての社会的なイメージなど、こうした外側の《記号》がもたらす社会的な偏見に満ちた見方を、その時に持つてしまうからです。

そのような意味で、この作品には強い衝撃を受けました。「わたしが何であるかより／わたしが何をしているのかを／質問してほしい」というメッセージは、普段の日常生活のなかでは見過ごしてしまいがちな人権についての重大な問題意識を提起しています。

さらに最終連の「自分と違う「何であるか」を持つひとと／対話できますか」という問いかけは、日本の社会に根強くのこる問題への批判が含まれていることは言うまでもありません。

〈佳作〉（学齢児童生徒の部）

作品名「子どものような大人になりたい」 長濱 真奈美

この作品は、一見すると、大人になりたいという後ろ向きな思いを表明しているように思わ

れますが、決してそんなことはありません。「自分勝手に／意見をころころ変え／他人を見下して／（略）想像力を無くして／（略）生きる意味を見失っている」ような大人にはなりたくないとはつきりと言っています。

そして作者が、子どもらしいと感じている点を挙げてみると、「みんなであることがこころから嬉しくて／自分の考えに正直で／みんなのことが大好きで……」など、子どもらしいというよりも、《人間らしさ》というものについて述べていることに気づきます。つまり、この作品は、この社会をつくりあげている大人たちへの手厳しい叱声であると同時に、自分の考える大人になるという反語的なマニフェストになっています。

他人との関わりを大切にし、周りの人を敬い、自分の生き方に自信をもち、さらに、日常から新しいものを発見し、そこに喜びを見いだしていくことに幸せを感じる——そんな大人になりたいと宣言する心のどこかに、今の大人たちにも、そんな大人になってほしいという願いが込められているように思えてなりません。

《審査総評》

今回の応募作は、テーマがそれぞれに深くそしてバラエティに富んだものが多かったように思います。特別な事柄ではなく、日常のどこにでも見られることを題材に、作者自身の体験を自然体で書いたものばかりで好感が持たれました。その半面、原稿の書き方や文章に問題が多く見られたのは残念です。少なくとも、公募に出す時点で、しっかりと原稿用紙の書き方を学んでおくべきでしょう。また、童話だからと言って、子どもにもおねる必要はありません。書きたいことを読者に伝えること、大人目線ではなく子どもの立ち位置に立って書くことが大事なことです。人権という言葉にとらわれ過ぎると、単に大人の道徳観を押し付ける事にもなってしまう、物語としての楽しさが無くなってしまう作品も多く見られます。学齢児童生徒の部の応募が少なかったのが残念です。

〈最優秀賞〉

作品名「ひきざんじゃない」 黒田 紀子

障害を持つまさこちゃんを、最初は好奇心で見っていたぼくは、徐々にまさこちゃんの明るさに惹かれていきます。相手を気遣うことは見てみぬふりをするのではなく、きちんと理解して自分と同じ線上で見ることが大事だと気付かされる作品です。ともすれば私たちは障害のある人に対して、自分が優位である立場をとった上で親切にしたり手を差し伸べたりしがちです。しかし、この作品の主人公は、自分にはない頑張りを相手の中に見つけて、むしろまさこちゃんを尊敬するようになっていきます。タイトルがユニークで、作品の内容を上手く表しています。低学年向きということで平仮名かきでしたが、読みにくく誤読の恐れもあるので、最小限の漢字は使った方がいいで

しよう。おばあちゃんの話が秀逸でした。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「竹さんは今夜も」 石川 純子

戦争という悲劇を底に、靴職人の竹さんが孫と共に戦争に行つたきりの息子を待ち続ける話です。息子が帰つてこないことを知りながらも、突然行き倒れになつた軍服の男を介抱し、しばらく一緒に暮らすうちに情が移つていきます。しかし所詮は他人、そのうち男は故郷に帰つてしまうという何とも物悲しく、そしてあの悲劇を思い起こさせる優れた作品でした。

文章もうまく、話の展開も見事でした。ただ、軍服の男が来て帰つただけの展開となつてしまつたことが、非常に残念でした。男がもつと何かを語らなければ、戦争の悲劇は悲しみだけで終わつてしまいます。その結果、竹さんと孫が中途半端になつてしまいました。軍服の男のその後を、二人の生き方に絡めてほしかったと思います。

〈優秀賞〉（学齡児童生徒の部）

作品名「白い町」 川畑 実生

とても読みやすい文章で、シンプルなお話でありながら、差別とは何か、人と違うことは何かを問ひかける作品になっています。白色しか認めない町で、それをNOと言えない人たち。私たちの日常でも、大なり小なりこういう目で見えた目の差別はたくさんあります。その中で立ち上がつて「ぼくはぼく」「わたしはわたし」と言える勇氣はなかなか出ません。まわりがどんなに頑なにみんなと同じことを良しとしたとしても、「これが自分だ」ときっぱり言えた時の清々しさと、それが巻き起こす大きな変化を見事に書ききっています。文章もきちんと書いて、10枚を飽きずに読めまし

た。個性が叫ばれる現代においても、結局は、人と違うことを避ける風潮は百年前と変わっていないのかも知れません。

〈佳作〉

作品名「ピンちゃんとカタツムリ」 藤田 文

この作品も、見た目で差別したりされたりする怖さを描いています。こういったお話は沢山あるのですが、この作品はそれだけで終わっていないところが優れていました。ありふれた差別観だけではなく、人と違うことで誰かの役に立っていることに気付いた主人公の頑張りこそが作品の核になっていきます。それも、他人から言われたり手助けしてもらったりではなく、自分自身で解決の道を見つけないと大切なことを思い出させてくれる作品でした。人はみな平等と口で言うだけでなく、人と違ったところがあるからこそ、それを活かして社会貢献ができることを教えてくれる作品でした。

作品名「バスの中」 大恵 やすよ

ウサギとネコとヤギとライオン、これだけが同じバスに乗り合わせるといっただけで、なんだか楽しくなってくるお話です。バスや電車の中に、優先座席というものが出来て以来、むしろ以前よりも人と人との関係がぎくしゃくしてきたように思うのは、私だけでしょうか？

優先座席があるんだからわざわざ席を譲らなくてもいい。優先座席だから大きな顔をして座ればいい。お互いが思いやる前に、こんな風潮が先走ってしまつて、人間本来の優しさがどんどんなくなっていくような気がします。この作品は、そういった一見正義と思えることも、時と事情によっては悪意にもなるということ、規則や常識にも柔軟性が大切だと認識できる作品でした。

作品名「ひろくんのうた」　いよくけいこ

一見して汚れた格好のおじいさんに、ひろくんは目を合わせることも挨拶を返すこともできません。大人も同じです。自分と少しでも違っていたりすると、自然に遠ざかろうとしてしまいます。話しかけてくれたおじいさんに、何とか応えようとするひろくん。楽しいはずのお買い物もの雲行きが怪しくなります。でも、いつも自作の歌を作ってお話をするひろくんは、おじいさんにも歌で答えようとしています。ミュージカルのような展開に思わず口元が緩みました。「バーイバーイ、さよなら」と歌うひろくんの声が、おじいさんの胸に夕焼けのように広がっていったでしょう。やさしい気持ちになれる作品です。

作品名「秋祭り」　水谷　生子

独り暮らしのさえおばあさんは、うさぎとクマの友だちがいます。どちらもそれぞれにいいところがあり、また欠点もありますが、おばあさんは二人とも大好きです。ところが、うさぎは自分が一番だと思っていたのに、おばあさんがくまを誉めたことが気に入らず、優しくなれません。おばあさんの気持ちに一番も二番もないのに、勘違いをしてくまに意地悪してしまううさぎ。だれにでも覚えのある感情です。熊はどんくさいので失敗ばかりしていますが、おばあさんはそれも個性と考えているのです。お祭りの夜に、星を見上げながら、それぞれがお互いのことを思っていたことに気付きます。心温まるお話です。文中、読点が多いのが気になりました。せっかくの文章が途切れてしまいます。

The background of the entire page is a repeating pattern of white flowers and stems on a gray background. The flowers are small, five-petaled, and arranged in clusters along thin, curving stems. The pattern is dense and covers the entire area.

最優秀賞

《最優秀賞》

小説部門

自由を僕らに

大新 健一郎

初めて通る道は、まだ車輪に馴染まない気がする。揃えた脚の上のランドセルに、桜の花びらが舞い落ちてきた。

「大ちゃん、一人で大丈夫？」

背後で車椅子を押す、お祖母ちゃんの声が心配そうだ。

「大丈夫だよ、もう五年生だし。前の学校でも、上手くやってたから」

二年前に交通事故で下半身不随になって以来、ずっと座った高さで世界を見てきた。そんな瀬戸大輝にとって、知らない土地はいっ

も、思いがけない段差をクリアする試験会場だ。父親の転職に伴い、祖母の住むこの街に引っ越してきてからも、毎日が階段や傾いた舗道との駆け引きに満ちている。ただ、そんなことより、新しい学校で一番気になることを、身体を後ろにねじって改めて聞いた。

「ねえ、お祖母ちゃん、今度の学校にもプールはあるよね」

「うん、まあ……そりゃ、あるはずだよ」

気乗りのしなさそうな返事にも、大輝は満足して前を向いた。足が動かなくなるまでは、毎週、スイミングスクールに通っていたのだ。若い頃に水泳選手だった母が、一人息子にも習わせたがったからだだった。ただ、スクールに行く途中の車の衝突事故で母は亡くなり、大輝も身体に重荷を負った。それからというもの、水泳の話題は家では避けられている。

「まだ泳ぐのは早いって、先生も言ってるんじゃないの？」

ためらいがちな祖母の声も気にしない。

「大丈夫だつて。パラリンピック選手の泳ぎを、ユーチューブで研究してるし。作業療法士の先生も、応援してくれるって言つてたよ」あの事故以来、父は水泳を許してくれない。しかし大輝にとつて、泳ぐことは母を忘れないということだった。その口癖だった、「いつも自由でいなさい」も含めて。

転校したばかりの新しい教室には、新しい同級生が一杯で、全員がこちらを見ていた。教壇の隣から数えると、だいたい二十人ぐらいだろうか。ここまでは、事前に予想していた通りの緊張だった。だが、思いがけない転校生が、大輝の隣には立っていた。ただ単に、同じ四月の新学期に一緒のクラスに入るといっただけで、ここまで驚きはしない。

「今日から新しくお友達になる二人です。こちらが瀬戸大輝君」。担任の若い女の先生は、笑顔のまま眼鏡に手を添えて続けた。「その隣がナラヤン・シン君です。お父さんのお仕

事の關係で、三年前にネパールから日本に来ました」

クラスの視線が、二人の間を行ったり来たりしている。どちらに注目しているのか、決めかねているのだろう。先生に、「じゃあ自己紹介してもらえますか」と言われ、まず口を開いたのはナラヤンの方だった。

「ナラヤンです。好きなものはバレーボールです。日本語はまだ難しいので、いろいろと教えてください」

浅黒い肌に大きな瞳で、丁寧にお辞儀をする。彫りが深くて背筋も伸びて、俳優みたいだ。発音には、まるで違和感がない。大輝も負けじと、声を張った。

「瀬戸大輝です。好きなものは水泳です。目標は、二五メートルを平泳ぎで泳ぐことです」

おっつ、というどよめきが湧いた。車椅子で水泳というのが、やはり意外なんだろう。

「じゃあ、一番後ろの窓際に座ってもらえますか。高木さん、学級委員として、二人に色々

と教えてあげてね」

はい、と言って後方の席で立ち上がったのは、髪の毛の長い、すらりとした女子だった。ナラヤンと二人で、指示された場所に向かう。いつの間にか、ナラヤンが車椅子を押してくれている。並んで席に着いたら、高木と呼ばれた女子が前の席から振り向いて微笑んだ。

「一時間目は算数だから。分からなかったら、何でも聞いてね」

どうやら優しそうだ。ナラヤンと顔を見合わせて、お互いにはっとした表情を交わした。休み時間になった途端に、教室の全員がこちらの席の周りに押し寄せてきた。

「バレーボールって、ネパールでやってたの?」「水泳って、どこかに通ってる?」「二人に浴びせられる質問は果てしない。

「待ちなさいよ、ちょっとは考えさせてあげたら?」

戸惑っていたら、高木さんが立ち上がって、みんなを制してくれたお陰で助かった。いい

人だ。まずナラヤンが、にこやかに答えた。

「ネパールでは、サッカーやクリケットと同じぐらいバレーボールが人気なんだ。特に山奥の村では、狭い場所でもできるから」続いて大輝。「水泳は昔習ってて、今は休んでるけど、また泳ぎたい」

二人の返事に、誰かが意外な質問をした。

「ネパールって、水泳の授業あるの?」全員の目がナラヤンに集中する。

「ネパールには海がないし、学校ではあまり教えないから、僕もまだ上手く泳げない。でも、リオデジヤネイロ・オリンピックの最年少出場者は、ネパールの水泳選手だよ」

へーっ、という嘆息が全員から漏れた。大輝は、ネパールという国について、もっともつと知りたいたいと思った。

そんなふうにして転校初日は、あつという間に過ぎてしまった。授業が終わり、職員室でこれからの説明を、担任の鈴木先生から高木さんも交えてナラヤンと一緒に聞いている

と、お祖母ちゃんが入り口に姿を見せたのでびっくりした。

「お祖母ちゃん、どうしたの？」

「うん、大輝を迎えに来るついでに、担任の先生に改めてご挨拶しようと思ってね」

そう言いながら、ナラヤンを見て目を丸くしている。

「お祖母さん、ちょうど良かったです」鈴木先生は立ち上がって挨拶をした。「実はこの後、ナラヤン君のお宅を訪問する予定なんです。よろしければその後、大輝君のお宅にも寄らせてもらっていいですか」

先生の言葉を聞いて、ナラヤンが振り向いて手を挙げた。

「先生、だったらみんなでうちに来なよ」

急な提案に、先生が戸惑っている。

「え、いいの？ ナラヤン君」

「いいよ。父さんと母さんにも、新しい友達を紹介したいし」

ナラヤンの手がそつと大輝の肩に触れた。

照れ臭いけど、同じぐらい嬉しい。

「あ、いいな、私も行っていい？」高木さんも割って入る。

「うん、大勢の方が楽しいから」とナラヤン。

「私は構いませんよ」とお祖母ちゃん。

そうしてその場の全員で、ナラヤンの家に行くことになった。

駅前にあるネパール料理店が、ナラヤンの家だった。まだ準備中で、香ばしい匂いの漂う広い店内にはお客さんは誰もいない。ナラヤンが、聞き慣れない言葉で奥に声をかけると、小さな帽子をかぶった大柄な男性と、民族衣装らしい服をまとった女性が笑顔で出てきた。この二人が両親なのだろう。

「いらっしやいませ。どうもありがと、ございます。お座り下さい」一番大きなテーブル席に通された。お父さんの発音はややぎこちない。ナラヤンはあんなに流暢なのに。

「担任の鈴木です。お忙しいところ申し訳ありません。私一人で来るつもりだったので

が……」先生は、他の全員に目配せをした。

「いえ、かまいませんよ。私たちも、息子の学校の人と、お知り合いになりたいですから」

テーブルには、ナラヤンの家族を正面にして、先生と大輝たちが並んで腰掛けた。車椅子はいつもお誕生日席になって、一番偉いみたいで恥ずかしい。鈴木先生が、まず最初に話し始めた。

「今後は、学校からの連絡についてはプリントなどでお知らせします。ナラヤン君には、こちらの高木さんと、一緒に転校してきた瀬戸君も授業のことを教えてくれると思います」先生はそこで一度、言葉を区切った。「ところで日本語の読み書きについては、ご両親はいかがでしょう」

お父さんが、ナラヤンとお母さんを見た。

「私は店もしてますし、だいたい大丈夫ですが、妻はまだ日本語が上手くありません。前の学校でも、授業に準備するものの連絡内容が分からなくて困りました。工作用の牛乳の

紙パックとか、ネパールにはなかったもので」

お母さんが隣で寂しそうな表情をしている。そんな様子を見て、鈴木先生が鞆から何かのパンフレットを取り出した。表紙に書かれてある文字は英語だ。

「こちらは、今度からうちの学校と協力することになったNPO法人で『W a i W a i くらぶ』という外国人の支援組織です。まだ日本語が得意でないお子さんや、そのご家族の日本語教育の課外授業をしたり、地域の外国人の方々の交流をお手伝いしています。ナラヤン君は、まだ漢字の読み書きが難しいようなので、学校での日本語特別授業にこの法人から日本語補助教員を派遣してもらう予定です。そこで、もしよろしければお母さんも、法人本部での日本語教室に参加されてはどうですか」

パンフレットの表紙には、いろんな国の家族が楽しそうに集まっている写真が載っていた。手に取ったお母さんが、熱心に目を通し

てから、鈴木先生の顔を見た。

「店の手伝いもありますが、ぜひ息子と同じように日本語の勉強をしたいです。ただ、お金はどうなるんでしょう」

「県からの補助がありますので大丈夫ですよ」鈴木先生が身を乗り出した。「近いうちに、こちらの法人の見学に行かれてはいかがでしょうか。私も付き添いますので」

お父さんとお母さんは、外国語で何か相談してから、先生の顔を見た。その表情は明るかった。

「分かりました。できるだけ早く、ナラヤンも連れて見学に行きます。今日はせっかく来ていただいたのですから、ネパールの料理を食べて行ってください。お金はいりません」笑顔の二人の申し出に、お祖母ちゃんが慌てて手を振った。

「いや、そういうつもりで来たのでは……」

「遠慮はいりません。私たちも、ナラヤンの新しい友達に会えて嬉しい」

そのまま全員で、初めて食べるネパール料理をご馳走になった。スパイスの効いた味付けのチキンや魚に、お祖母ちゃんはしきりに感心して、うちでも試してみようと言っていた。お祖母ちゃんは結構、料理上手なのだ。

ナラヤンの家族に見送られて店を出た時には、思ったより遅い時間になっていた。夕焼けが空に広がっている。鈴木先生が、お祖母ちゃんに申し訳なさそうに頭を下げた。

「すいません、こんな時間になってしまったので、瀬戸君のお宅には明日、お伺いしてよろしいですか」

車椅子を押しながら、お祖母ちゃんは頷いた。「いいですよ、うちはいつでも。先生も、いろんな生徒さんがいて大変ですね」

鈴木先生は改めて詫^わびてから、大輝の背に手を触れた。

「瀬戸君の通学については、校長や保健担当の教師とともに、リアフリーを進めています。学校の施設で使いにくいところがあれば

ば、遠慮なく言ってください」

車椅子を挟んで先生と反対側を歩いていた高木さんも、笑顔を見せた。「瀬戸君、何か困ったことあったら、私にも相談してね」ちよつと、どきつとする。

夕暮れとともに街灯が次々に灯り始めた。大輝は、隣を歩く先生の顔を見上げた。

「ねえ先生、僕もナラヤンのお母さんが行く日本語学校を見学していい？」

「え、そりゃナラヤン君が良ければ……瀬戸君、興味あるの？」

大輝は視線を前方に向けた。

「うん、前の学校には外国人の子なんていなかった。だから、車椅子の僕だけが浮いてたっていうか、特別扱いだったんだ。でも、ナラヤンみたいに外国から来て頑張ってる子を見て、もつとそういう人達のことを知りたくなった。それに、ナラヤンは僕のことを友達って言ってくれたし、嬉しかった」

高木さんが、顔を覗き込んでくる。「私も

友達よ、瀬戸君」そのまま鈴木先生を振り返った。「先生、私も見学に行つていい？ 学級委員として、二人を先導する責任があるから」長い髪が風になびいている。

「そう？ ありがとう高木さん。じゃあ私の方から、先方には伝えておくわね」

四人で進む帰り道で、大輝は新しい学校での生活に思いをはせていた。

翌週の土曜日、最寄り駅から二つ先の大きな街の駅前ビルにあるNPO法人「Wai Waiくらぶ」を、みんなで訪れた。ナラヤンとお母さん、鈴木先生、高木さん、そしてお祖母ちゃんと大輝を、出迎えてくれたのは若い女性職員だった。短い髪が、明るくて活発な印象だ。

「ここには今、十一カ国の外国人や、外国につながる子どもたちが通っています。私のようなボランティアから日本語を学んだり、それぞれの国の文化を学び合ったりしていま

す」

広々としたスペースには、机で勉強している子どもや大人だけでなく、奥の方には皆で料理をしているグループもあった。壁には大きな世界地図と一緒に、たくさんの言葉での挨拶が張り出されている。大輝は、本棚の前の床で、車座になって子どもに絵本を読み聞かせている様子を見ながら、ナラヤンの顔を見た。

「ねえ、日本語って、やっぱり難しいの？」

ナラヤンが困ったような表情をする。

「うん、話したり聞いたりはともかく、読み書きがね……特に漢字は、読み方が幾つもあった大変」

その言葉を聞いて、案内してくれていた職員的女性が前屈みになって、視線の高さをナラヤンに合わせた。

「大丈夫、私たちと一緒に勉強したら、すぐ上達するよ。このNPO法人で学んだ子の中には、高校や大学まで進んだ人も多いから、

ナラヤン君も頑張ろう」

大勢の外国人の姿を見て、ナラヤンも勇気づけられたようだ。大輝を振り返って視線を合わせた。

「大輝、僕、勉強頑張るよ。それと、バレエボールももつと上手くなれるよう練習する。だから大輝も、水泳頑張って」

「うん、分かった。必ず泳げるようになる。これは僕らの、男と男の約束だ」

二人で握手していたら、高木さんが割り込んできた。

「何よそれ、男とか女とか関係ないでしょ。私だって、二人に負けずに頑張るわよ」

「高木さんは、何を頑張るの？」とナラヤン。

「えーっとね、とりあえず学校の児童会長に立候補する。私がああ学校を、今よりもっと良い学校にする」

「それは頼もしいわね」鈴木先生が笑っている。「ナラヤン君のお母さん、ここには通えそうですか」

真剣な表情でフロアを見ていたお母さんは、決心したような目で振り向いた。

「はい、私も夫や息子を見習って勉強します。前の学校の近くには、こういつた場所がなかったのですが、ここならいろんな国の人がいるし、私も心強いです」

「料理だったら、私も教えられるよ」そう言ったのは、お祖母ちゃんだ。「あそこでみんなで作ってるの、楽しそうだし加わりたいね」

職員の女性が顔を輝かせた。

「ここでは地域の日本人との交流会も開いていますし、料理教室は人気なんです。良かったらぜひ、参加してください」

フロアのあちこちを見学して、大輝はこんなに外国の人が身近にいるのだということに驚いていた。ナラヤンと同じように、誰もがいろんな事情で日本に来るようになったんだろう。そんな現実にめげずに、こうやって乗り越えようとしているんだ。大輝もまた、自らの両脚に手を添えて、きつと二五メートル

を泳ぎ切ってみせると誓っていた。

大輝とナラヤンは、同じ転校生ということもあって、一番の仲良しになった。授業は隣の席で互いに教え合い、放課後もよくナラヤンの店に寄ってご馳走になったりした。ナラヤンの苦手な漢字は大輝が教え、大輝が移動する時の車椅子はナラヤンが押していた。大輝が父親には内緒で、市営の室内温水プールの水泳教室にこっそり通い、ボランティアや作業療法士に支えられながら泳ぐ練習を始めながらも、ナラヤンはお祖母ちゃんと一緒に応援に来てくれた。大輝にとって、ナラヤンは新しい学校で最初にできた親友だった。

ただ、転校してふた月が過ぎる頃には、ナラヤンと他のクラスメートの間に、少しずつ距離が生まれ始めていた。

「何だよナラヤン、また給食残してるのか」

ナラヤンが、食べ残したおかずや牛乳を給食台に戻している。クラスで一番背の高い山

崎という男子が、見咎めて注意していた。

「うちは朝、ちゃんと食べてるから……」ナラヤンが言い淀む。

「そういう問題じゃないだろ。ここは日本なんだから、郷に入っては郷に従えって言うだろ」

山崎が責めているのを見て、鈴木先生が近寄って来た。

「山崎君、ネパールでは朝しっかり食べて、昼は軽く済ませるのが普通なの。それに、牛肉は食べてはいけない食べ物なのよ」

「先生、それじゃ不公平なんじゃないですか」山崎は不満そうだ。「じゃあ僕だって、ピザの配達頼みたいです」

「山崎！ 勝手なこと言うな！」

大きな声で睨んだのは高木さんだった。けれどもナラヤンを囲んで、何だか教室中が気まずい雰囲気になっていた。

それからというもの、ナラヤンに対してみんなが距離を置くようになった。ナラヤンが

日本語の特別授業から帰ってきた途端、今まで騒がしかった教室が急に静かになったり、ひどい時には、バレーボールの授業でナラヤンにだけボールを回さないことまであった。学校の廊下で、大輝の車椅子をナラヤンが押している時、後ろから「ガイジンは帰れ！」という笑い声が響いて来た時には、さすがの大輝も「誰だ、今言ったの！」と大声をあげてしまった。そんなことが続くうちに、ナラヤンは次第に無口になり、とうとう学校に出来なくなった。

「今日の一時間目はホームルームにします」

鈴木先生がそう言ったのは、ナラヤンが登校しなくなつて一週間が過ぎた頃だった。大輝は高木さんと一緒に、放課後にナラヤンの家の様子を見に行ったりしていたが、いつもお母さんが出て来て、まだ学校には行きたくないと言っていると告げられるだけだった。そのことは、鈴木先生にも伝えていた。

教壇に立った先生が、みんなを見回してから口を開いた。

「ナラヤン君が学校に来なくなったのは、どうしてだと思いますか」いつも穏やかなのに、今日は真面目な顔だ。

「クラスのみんなが、誰も喋ってくれないからだと思います」高木さんが、立ち上がって答えた。

「高木、余計なこと言ってるじゃねえよ」山崎は座ったまま腕組みしている。誰も何も言おうとしない。

「どうして誰も話さなくなったのかな」

黒板を背に、鈴木先生が教室を見渡した。全員が俯うつむいている中で、山崎だけは上を向いて先生の視線を受け止め、ゆっくりと腰を上げた。

「先生、何でナラヤンだけ特別扱いなんですか。給食を食べなくて良かったり、特別授業があったり。それに、先生は放課後によくナラヤンの家に行って、色々と面倒見てますよ

ね。俺達はほったらかしなのに、不公平じゃないですか」

「僕も特別扱いだよ」大輝はたまらなくなつて声を上げた。「教室の段差をなくしたり、トイレを改装したりしてもらってる」

「お前はいいんだよ、足が悪いんだし」山崎の言葉に続いて、どこから声がした。「それに、日本人だしな」

教室に張り詰めた空気が流れた。鈴木先生が、ふと悲しそうな表情を見せてから、チョークを持って黒板に向かった。先生は普段よりずっと大きな文字で、「劉麗麗」と書き、みんなを振り返った。

「まず先生は、みんなに謝らなければなりません。ナラヤン君のことで、先生が不公平な態度を取っていたのなら謝ります」

先生は深く頭を下げた。誰も何も言えずにいると、先生は再び顔を上げて全員を見た。

「ここに書いたのは、先生が前の学校で受け持っていた生徒の名前です。中国から来た女

の子で、六年生でした。絵が上手で、明るくて、学校の勉強も一生懸命でした」そこでひとつ、溜め息をついた。「でも、教室で上手く馴染めずに、自殺してしまっただんです」

教室中が息を飲むのが分かった。大輝は先生の顔から目が離せなかった。

「先生は彼女が辛い思いをしていることに、全く気づいてあげられませんでした。後で知ったのですが、教室でひどいことを言われて、無視されて、しかも誰も助けてくれなかったそうです。彼女が死んでから、反省する子もたくさんいましたが、もう彼女は戻ってきません。ご家族は今でも、悲しんでいます」先生は涙を見せなかった。ただ静かな口調で、淡々と話すだけだった。

「ナラヤン君のことで、先生がみんなにとつて不公平に見えたなら、それは死んだ彼女の笑顔が胸に突き刺さっていたからだと思いません。これからは先生、もっと良い先生になるように努力します。だからみんなも、知らない

い国に来て心細いナラヤン君のために、良い友達になってあげてくれませんか」

教室の誰もが目を伏せて、すすり泣く女子も何人かいた。大輝は、ナラヤンとみんなを結ぶのは自分しかないと強く思った。ナラヤンの最初の親友は、自分だからだ。手を高く挙げて、先生の目を捉えた。

「瀬戸君、どうしたの？」

先生の言葉で、全員の視線が集中した。

「先生、僕、今日もナラヤンの家に行ってきます。ナラヤンとの約束を、まだ果たしてないから、それを伝えに」

「私も行く」高木さんが、振り向いて力強く言った。それに続いて、教室のあちこちから「私も行く」「僕も」という声があがった。

「先生も行くわ、瀬戸君、ありがと」鈴木先生が朗らかな表情を見せた。その場の誰もが、ナラヤンの顔を思い浮かべていたに違いない。山崎も小さな声で「俺も行くよ」と言うのを聞いて、大輝は温かい気持ちになった。

「先生、みんな、どうもありがとう。じゃあ、ナラヤン宛の手紙を書くから、それを渡すのにみんなで立ち会って」大輝は周りをぐるっと見た。全員が頷いていた。

その日の放課後、クラスメートと一緒に、大輝は休み時間に書いた手紙を持ってナラヤンの家に向かった。ナラヤンはやっぱり出て来なかったが、お母さんが涙ぐんだ目をして取り次いでくれた。こんな手紙だ。

ナラヤンへ、

元気にしてますか。最近、会えなくて寂しいです。僕との約束を覚えていますか。ナラヤンは勉強とバレーボールを、僕は水泳を頑張るといふ約束です。僕は週に三回、市民プールで水泳の練習をしています。ナラヤンも応援に来てくれたよね。今度の土曜、初めて二五メートルに挑戦しようと思っっています。良かったら見に来て下さい。午前十時から、いつもの第一コースで

待っています。

瀬戸大輝

土曜の朝、市民プールには、大輝とお祖母ちゃん、鈴木先生、そしてクラスの全員が集まっていた。水泳着に着替え、車椅子のままプールサイドに出た大輝は、改めて周りを見渡した。お父さんには、やっぱり言えなくて秘密にしている。ナラヤンはまだ来ていない。

「大輝君、無理しないようにね」

水泳ボランティアの大学生のお兄さんと、作業療法士の先生が、心配そうに同じ言葉を繰り返している。まだ二五メートルは早いんだ。ではというのを、大輝が強引に説得したのだ。「大丈夫、これは友達との約束なんだ」

大輝は力強く答えてから、大学生のお兄さんに抱えられてプールにゆっくりと入った。体が水に浮く感じが気持ちいい。コースロープに掴まって、しばらく休憩する。

「瀬戸君、無理しちゃ駄目だよ」高木さんが飛び込み台から顔を覗かせた。

「心配ないって。それより、ナラヤンが来たら、すぐにここまで連れてきてね」

「分かった」

クラスのみんながプールサイドで見守っている。大輝はもう一度、プールの出入り口に目を遣ってから、静かにコースロープを放して平泳ぎの腕掻きを始めた。隣のレーンでは、ボランティアのお兄さんが併泳してくれているから安心だ。

両脚はただ、だらりと後ろへ投げ出しているだけで、昔みたいに力強く水を推すことができるわけではない。しかし、その足りない分は腕の力と、体全体を上手く使うことで補っている。ゴールである向こうの壁は息継ぎの度に見えるけれど、すごく遠くに感じる。プールサイドからは、「頑張れ!」「いいぞ!」というクラスメートの声が届く。大輝は懸命に腕を動かしていた。ナラヤンに、きつと会

えると信じて。

十五メートルを過ぎた辺りで、だいぶ息が切れてきた。やっぱり、まだ早かったか。でも、ここが踏ん張りどころなんだ。大輝は全身を使つて少しずつ前に進んだ。

息継ぎも苦しくなつてきて、首が痛い。空気を吸い込んで、水に頭をつける。何だか意識が朦朧としてくる。伸ばしていた両腕を、目の前で大きく左右に開いて後ろに押しやった時、水中のはるか彼方に、懐かしい笑顔がほんやり霞んで見えた。

「お母さん……!」

思わず手を伸ばしかけたら、いきなり水をたくさん飲み込んでしまつて、水中で激しくむせた。苦しくなり、もがいてしまう。目の前は自分が吐き出した泡と、掻き乱された水泡とで一杯になった。まずい、と思つた瞬間、隣のレーンから腕が伸びてきて助けられるのが分かった。ただ、何故か腕は身体の両側から差し伸べられていた。

「大輝君！ 大丈夫か？」

ボランティアのお兄さんの声が、すぐ耳に飛び込んできた。激しくむせながら、首を縦に振る。ただ、反対側にも人の気配と、自分を支えてくれる腕を感じた。

「大輝！ 大丈夫か？」

そちら側に顔を向ける。ナラヤンが、服を着たまま水の中に立っていた。

「ナ……ナラヤン……」大輝は、咳き込んで名前を呼ぶ。

「駄目じゃないか、無茶したら」とナラヤン。

「……来てくれたんだ」

「……当たり前だろ、これは、男と男の約束なんだから」

ナラヤンが泣きそうな顔で笑っている。大輝は、片腕をナラヤンの首に回した。

「じゃあナラヤンも、約束、守るよね」

ナラヤンは、大輝の肩に手を添えた。

「うん、頑張る。勉強とバレーボール、頑張るよ」

プールサイドから、大きな拍手が沸き上がった。クラスのみんなが、こちらを向いて笑顔で手を叩いているのだ。突然、その中の一人が輪の中から抜け出して、服を着たままプールに飛び込み、近づいて来た。山崎だった。

「ナラヤン、お前、服着たままプール入っちゃ駄目だろ！」山崎が笑いながら、ナラヤンの肩に手を回した。

「君だって、着たままじゃないか」

ナラヤンが返したのに、大輝も「そうだ、そうだ」と重ねた。三人で揃ってプールサイドへと方向転換した時に、大輝はクラスメイトから少し離れて立っているお祖母ちゃん、と、その隣に思いもかけない人がいるのを目に留めた。お父さんだった。

お祖母ちゃんはハンカチを目に当てて泣いている。お父さんは、ただ静かに微笑んでいる。きつと、お祖母ちゃんがこっそり教えたんだ。でも、あの様子ならあまり怒られずに

済みそうだ。これもお母さんのお陰かな。お母さん、僕は今、とても自由だよ。

大輝はそれから水泳の練習を続け、五年生のうちに二五メートルが泳げるようになった。ナラヤンも勉強とバレーボールに励み、市内の少年チームで代表に選ばれるほどになった。その同じチームには、山崎も所属している。ちなみに、高木さんは六年生の時に生徒会長選挙に立候補し、大輝とナラヤン、山崎の応援の甲斐あって、見事当選を果たした。

《最優秀賞》

随想部門

今から一步

浜田 加代子

私の息子は今、四十歳。アスペルガー症候群との診断を受けている。これは広汎性発達障害、あるいは知的障害のない自閉症といわれる。先天的な脳の機能障害で伝達の仕組みが特別らしい。その結果、こだわりや偏りが著しく、コミュニケーションがとりにくく色々な生きづらさが生じてしまう。彼は太っていて着こなしがうまくできないのでダラーとした感じを漂わせている。また、緊張が強いため表情がこわばっていることが多い。

生まれてからごく普通に発育した。言葉数は少なくシャイだが、数字や文字を覚えるのが早く、我慢強い手のかからない子だった。私は何か違和感を覚えつつも、「これも個性かな」などのんびり構えていた。

幼い日のことを思い出す。一緒に歩いてるとき話しかけると、立ち止まって答える。食事をしていても、話すときは食べるのをやめる。今から思えば、「ばか丁寧な子だなあ」と得心していた自分の無知が腹立たしい。それが正に、『同時に二つのことが出来ない』特性だったのだ。

またあるとき、いつも電気などをつけっぱなしにしているので注意した。

「お部屋を出るときは消してね」

翌日、みんながいるリビングを出るとき、息子はスイッチを切って出た。

「あつ、何するの、これ！」

彼はキョトンとしている。私も訳が分からない。これも『空気をよまない』典型であつ

た。その時は呆れ果てながら、くどくど注意したけれど、息子はおろおろするだけであった。

数字には強かった。携帯のない頃、電話番号帳はなくてはならないものだったけれど、我が家は息子が全部覚えていたのでほとんど使わなかった。計算も早く『歩く電卓』と呼んでいた。プロ野球を見るのが好きだったが、これもゲームそのものよりスコアとかデータに興味があったようだ。

正式に診断を受けたのが二十四歳の時であった。その当時は現在のような情報がなく、私は、訳が分からなかった。不可解だった息子の言動に納得出来た気もしたが、頭の中はクエスチョンマークばかりが激しく点滅していた。

私は息子を育てるのに無我夢中だった。誰にも逆らわず、不器用ですべてがスローなのに、数学だけはものすごくできる。そんな彼

はかっこうのイジメの的だった。私は日々、原因を突き止めようとせず、対処だけに明け暮れていた。事あるごとに「母親のしつけが悪い」と言われ、少しでも社会性のある強い男の子に育てなければと、肩に力を入れて神経を張りつめて暮らしていた。全く方向が違うことにエネルギーを使い、疲れ果てていたのだ。

彼に関わる教師たちも、無理解で、見当はずれな励ましや叱責ばかりを繰り返していた。友だちからのイジメより、むしろ教師からの罵倒や体罰が息子を委縮させたように思う。ただ、その中でも元凶は私なのだ。

「あいさつをしなさい」

「きちんと片づけなさい」

「勉強しなさい」

人間関係を築くのが苦手なのだから、なんとか学歴とか資格をつけて世の中に出さなければと、眉吊り上げて叱咤していった。私をがんじがらめに縛っていた『一人前にしなければ

「ば」という呪いのようなものは何だったのだろう。どうして息子の内面に入り込んで包み込んでやれなかったのだろう。抱きしめてやれなかったのだろう。息子を守るために戦っているつもりの方が彼を一番苦しめていたのだと、後になって、悔いの棘が体中を突き刺した。

夫は企業戦士で単身赴任、姑からは「この子はうちの癌がんです」と言われ、六歳下の妹にも色々つらい思いをさせた。そして、『忘れない脳』の息子は、私たちの言動をフラッシュバックさせ苦しんでいた。

成人してからも様々なことがあった。数学推薦で入学した大学を中退せざるをえなくなつたとき、私はきつく言った。

「自動車学校くらいは卒業して」

紆余曲折はあったものの息子は卒業した。しかし、いくら待っていても試験場へ行かない息子がやつと言った。

「お母さん、自動車学校卒業してと言ったか

ら僕は卒業した」

私は口をあんぐり開けたまま固まってしまう。私の中では、免許証取得は卒業の結果当然のものだったけれど、息子はただ言葉通りだったのだ。

こんなこともあった。気軽に声をかけて下さる奥さんがおられ、息子にやさしくおっしゃった。

「また遊びにいらしてね」

しばらくして、その方から電話があった。

「何度も来られて迷惑しています」

驚いた私が息子に尋ねると、重い口をやつと開いた。

「いらしてねと言われたから行かなければならないと思った」

彼は外食が苦手だ。食べることは大好きだけれど、周りのざわざわ感が嫌なようだ。娘たちと外食するときも、最近では誘わない。彼はお気に入りの近くの焼肉屋さんの特製大盛り弁当を買って来る。一人のんびり食べるの

が一番楽しいみたいだ。何も知らない人が見たらきつと言うだろう。

「うんまあ、あのお兄ちゃんきつと先妻さんの子やね。顔はお父さんそっくりやものね。かわいそうに」

本で読んだのだが、彼らは舞台俳優が脚本を暗記するように、先のことをシミュレーションして必死で練習するらしい。でも現実には突発的なことばかりが起こる。アドリブでかわせないのでパニックに陥るらしいのだ。息子も、ずっと先の予定を手作りのカレンダーに書き込み、変更があると顔色が変わっていた。今は苦手ながらもずいぶん柔軟に対処できるようになってきた。

社会で、息子は偏狭で扱いにくい人間として排除される。人と関わっても、叱られるか笑われるか無視されるかしか体験してこなかったから、いつの間にか、関わることをやめてしまった。しかし、本来人が大好きで、

穏やかで優しい静かな人だ。家の三匹の猫を可愛がり、餌をあれこれ買ってきて時間通りに食べさせている。その猫に対して、命令したり大声をあげたりしたことを聞いたことがない。

今は、仕事をしていない。いろんな職種を経験してきたが、刀折れ矢尽きたのだろう。働かなければと、昼間家にいることすら出来なかった頃と比べると、やつと落ち着いて暮らせるようになったのだ。私が「一人前に」の呪縛から逃れられたからだと思う。私もいろんなことを学び、体験し、様々な方と接して、得たことがたくさんある。また、交通事故に遭い、『生きること』を考え直したことも大きいだろう。その人間のあるがままを受け入れる。「生きるに値しない命など絶対ない」のだと、お腹の中にどんと入れることができた。

母が変わると息子も変わる。まだまだ道は遠いし、親亡き後を考えると不安だ。でも、

ある講師が言われた。

「彼らは、親亡き後の方がしつかり生きていきますよ」

その時は笑ってしまったが、その言葉は一つの真実だと思う。いろんな方の支援を受けながらゆつくりと暮らしていきたい。

今、うれしいことは、

「雨降るかな？」

「このクイズわかる？」

など、とりとめのない会話が自然にできるようになったことだ。

たった今、パソコンに向かっている私の方に、息子が扇風機を向けて黙ってリビングから出て行った。それだけで私は泣きそうになった。

彼を分かりたくて、もがいてきた。でももういいのだ。私は母だ。感じればいいのだと思うようになった。

息子のことをずっと書きたかった。書くこ

とが自分の気持ちを整理することだと気付いたからだ。今、厳しかった周りの風景がずいぶんゆるみ、静かに佇たずんでいる私がいる。これを書き終えたら、一步を踏み出せそうな気がする。幸い夫も退職しとても協力的だし、案じてくれる娘夫婦もいる。支援して下さる方ともしつかり繋つながっている。状況は決して楽観的なものではないけれど、息子のやわらかな表情を胸に、さあ、今から新しい一步を踏み出そう。

《最優秀賞》

詩
部門

土手の道

岩井 いづみ

大きな川の土手の道、毎朝出会う母娘連れ
もう、若くはないお母さん
もう、子どもではない娘さん
まるで二体の達磨のように
黙々と駅を目指している

桜吹雪の土手の道、お母さんは先を行く
ずっと遅れて娘さん
遅れるのには訳がある
右の手足が不自由で、一歩進むのも大変そう
私の胸に疑問が一つ、「お母さん、なぜ

手を繋いで一緒に歩いてあげないの」

日差し焼け付く土手の道

「早う来おい」と、お母さん

駅の手前から振り返り

「遅れるぞお」と呼びかける

「だつてえ」と、娘さん

一足毎に立ち止まり、流れる汗を拭いている

「頑張つて」と、声をかけてもいいのかな

桜紅葉の土手の道、お母さんは先を行く

いつか、娘さんが独りになつても

一人でも、この道を歩いて行けるように

私にも、それが分つてきた

木枯らし猛る土手の道

吹きすさぶ風に押されてよろけて

娘さんが転んだ。お母さんは遥か先

「助けなきゃ」と、思ったその時

「大丈夫？」と、何人もが声をかけ

幾人もの手が娘さんを助け起こした

それで、私も気がついた

みんな、二人を気にしていた

何か、出来ないかと思っていた

そして、今、行動している

通勤、通学、行きかう人たちの

真心が通う、土手の道

《最優秀賞》

創作童話部門

ひきざんじやない

黒田 紀子

ぼくは、じつとまさこちゃんの手をみたんだ。いままで、こんなにちかくでまじまじとみつめたことはなかった。はずかしいこともあったしね。

にゆうがく式の日、あたらしいつくえと、せんせいともだちと、いちどにいつぱいうれしいことがあった。はじめてのきょうしつにはいると、せんせいがやさしくこえをかけた。

「おはよう、かいさんげんきにこれてよかったですね」

ぼくは、はずかしがりやなので、へんじがさつとできなかつた。せんせいは、

「いいよ、すぐになれるから」

といつて、いつてしまった。これが、がつこうでのいちばんさいしょのできごとだった。

だんだんなれてくると、ぼくはせきがとなりのこと、すこしずつおしゃべりをするようになった。

「きょうは、なにたべた」

とか

「きょう、かえつてからなににする」

とか、そんなかいわだった。でも、はなすことがとくいでないぼくは、こころのなかでは、とてもゆうきがいったんだ。

まさこちゃんが、ぼくのとなりにすわるようになったのは、五がつになつてからだ。ちようど、せんせいがみんなのかおとなまえとせいかくがわかつてきたときだ。

まさこちゃんは、かみのけをふたつくくつた、めのくりくりしたこだ。べんきょう

のときは、ちらつとぼくのほうをみることもあるけど、いつもせんせいのほうをみて、しっかりはなしをきいているのだ。なんでもいっしょうけんめいするおんなのこのようにおもっていた。

あるとき、ぼくはむねがどきどきした。まさこちゃんのみぎてのゆびをみてから。ちょうど、すうじのべんきょうをしていたところだった。いち、に、さん、し、ご、とかぞえていくと、ぼくのゆびはごほんだった。となりのまさこちゃんのゆびは、しでおしま이었다。ぼくは、もういちど、めとこころでかぞえた。

「いち、に、さん、し」

なんかいこころでかぞえてもいつほんたらないのだ。かぞえまちがいじゃないかと、ぼくは、めをこすってみた。あまり、よこばかりみていると、まさこちゃんが、へんなかんじになるといけないから、まえをむいたしせいで、めだけよこにむけていた。やっぱり、

よんほんしかない。

まさこちゃんは、ぼくとおなじようにじをかいていた。ほんをもつてよんでいた。なにもおかしいことはなかった。いまきがついたぼくは、なにがなんだかわからなくなっていた。

いえにかえってから、いおうかどうしようかまよっていた。おかあさんは、かいものについていなかった。おばあちゃんが、せんたくものをたたんでいた。

「おばあちゃん、ぼくのもだち、ゆびがいつほんすくないんだ。でも、ぼくとおなじことをやってるよ。すごいよ」

おばあちゃんは、おどろきもせず、こんなはなしをしてくれた。

「おばあちゃんがわかいころに、テレビでりょうてのないひとがふつうのひとがすることとをほとんどぜんぶやっていたのをみたことがあるよ。そのひとのほんもよんだよ。てがないのに、どうしてじをかくのかふしぎだった

たけど、のこされたあしやからだのぶぶんを
じょうずにつかっつて、なんでもやっておられ
たよ。あしがてのかわりをするんだ。すごい
な、にんげんのかのうせいって」

あたりまえにあることが、すごいのではな
くて、いかにじぶんのちからをだしきるかが
だいじなんだとはなしてくれた。

ほくは、そのはなしをきいて、まさこちや
んのがんばることはにているなとおもった。

じっさい、まさこちゃんは、ほくよりじが
じょうずだし、なんでもさつとやっている。
ゆびがいっぱんたりないとほくがきがつか
いくらいに。

しばらくして、がっこうでまさこちゃんの
ゆびのことを、せんせいがみんなにはなしを
した。だれかが、おもしろはんぶん、

「まさこちゃん、ゆびみせて」
といったこがいたからだ。

まさこちゃんのゆびは、うまれたときから
いっぱんたりなかったそうだ。おかあさん

は、ほかのことちがつているのをはずかしく
おもわないうようにと、いっしょうけんめいよ
んほんのゆびで、ふつうのことおなじように
できるれんしゅうをさせたそうだ。がんばり
やさんのまさこちゃんも、よわねをはかずに、
おかあさんについてれんしゅうした。

だから、だれもきがつかないくらいみんな
とおなじことをよんほんのゆびでやっていた
んだ。ひきざんじやない。よんほんのゆびで
ごほんのゆびとおなじことをやる。

すごいな、まさこちゃん。ほくは、まさこ
ちゃんのともだちであることを、みんなにじ
まんしたくなった。



優
秀
賞

《優秀賞・一般の部》

小説部門

お口はちりちり

吉植 芙美子

ドーン、ドーン、ドドーンド、ド
ドドーンド、ドドーンド、ドドーンド、ド
ン……。

夏祭りのたいこが鳴っている。早く友だちのヤエちゃんを誘いに行きたくて、シノの膝がうずうずしている。

「これっ、じつとせんと、おさげがいがんでしまうやないの」

お母ちゃんは、シノのおさげを結びあげる
と、糊のきいた浴衣の上に、よそゆきの絞りの帯を、金魚のしっぽのように結んでくれた。

「一錢玉二枚入れといたで。落とさんように」

小さい巾着が、シノの胸元に押しこまれた。新しい下駄が、鼻緒をゆるめて、土間にそろえてある。夏のぬり下駄は、シノのはだしの足にひやつとしていい気持ちだ。

くぐり戸を出ると、格子窓の並ぶ路地が、いつもと違って見えた。どの家も、祭り提灯を下げているからだろう。

ヤエちゃんの家は、この町の大きな造り酒屋だ。路地を曲がると、ヤエちゃんの家のお蔵が続いている。

白壁のお蔵は、下の方だけ、黒く焦がした板が張ってある。浴衣の袖がさわらないように気をつけながら、シノは、蔵のわきの溝にかぶせてある石のふたを踏んでいった。でこぼこのふたは、ときどきごとんと沈む。

しいんとした門ぐちまできると、シノは、そうつつ中を覗き込んで、ヤエちゃんを探した。

軒には、茶色くなった「さかばやし」がぶらさがっている。造り酒屋の看板だ。

吉野杉の葉を丸い竹かごにさして、大きな手まりの形にした「さかばやし」は、すずめ蜂の巣のようだ。いつ見ても気味が悪くて、シノはつい、首をすくめたくなる。

「シノちゃん、ここや」

酒蔵から、ヤエちゃんが顔を出して、手まねきした。

「はいっても、ええの？」

「へいきや。みんな、お祭りいかはったさかい」

シノは、いつもお母ちゃんから、「酒蔵はとうじさんの大事なお仕事場や。絶対、はいったらあかんよ」と聞かされている。シノは音を立てないように、蔵の敷居をまたいだ。

夏なのに、ひんやりとしている。薄暗くて奥が見えない。酒を造る桶や、米を蒸すコシキは、見上げるほどの大きさだ。それが、奥までずらりと並んでいる。鬼の台所のように

だ。

「ちょっとだけ、かくれんぼせえへん？　うち、前からいつぺんここで遊んでみたい、思ってたんや」

ヤエちゃんが、ひそひそ声で言った。

「ほんま、ここ、かくれんぼにええなあ……」

「うち、オニになる。シノちゃん、はよかくれ」

ヤエちゃんは、さっさと目隠しして、とおり柱におでこをくつつつけてしまった。

「もういいかい？」

ヤエちゃんの声が、ぎくつとするほど大きく響く。シノは、桶のかげにしゃがむと、息を殺して待った。

そのときだ。がらつと酒蔵の戸が開いた。

「オンナは、ここに入ったらあかん、いわれとるやろ！」

酒蔵じゅうに響き渡る声があった。ヤエちゃんのひとつ違いのお兄ちゃん、一太郎ちゃんだ。

シノは、息が止まりそうだった。

シノは、一太郎ちゃんをまつすぐ見たことがない。恐いのだ。

なにしろ、力が強くて、この辺りでは「ごんたのぼん」で名の通った一太郎ちゃんだ。通りすがりに、腕をひねられたり、ヤモリを背中につっこまれたりした子は数えきれない。

けれど、一太郎ちゃんを恐がるのには、もうひとつ、誰も口には出さない訳があった。

「あのぼんは、小さいときに、大やけどしはってん。何でかは知らんけどな。大事なあととりさんやのに、目え開いたままで、眠らなあとかんようになりはったんやて」

お母ちゃんは、そんなふうに話していた。

一太郎ちゃんの目は、片いっぽうがあかかんべをしたように見える。だから、左側から見ると、お宮さんの狒犬のようだ。

一太郎ちゃんが恐いののは、本当を言うと、

何よりもそのためだった。

「なんや、兄ちゃん、いてはったん？ ねずみがないとつたさかい、探しとつたんや」

ヤエちゃんは、けろつとした顔を作った。

「ほおー、ねずみと遊んどつたんか」

「遊んでへんよ、だれとも」

「ほな、はよこい。みこしがきとる」

一太郎ちゃんは、ヤエちゃんの手を引っ張ると、外からしんばり棒をかけてしまった。

「いやや！ うち、ともだち待ってんねん」

「あほ！ はよせんと、みこしがいつてまうで」

ヤエちゃんと一太郎ちゃんの声が、遠くなっていく。かわりに、たいこの音が近づいてきた。

シノは、あわつてて戸口にかけよつた。力まかせに引いてみても、がたがた鳴るだけで、戸は開かない。

二階の小窓の障子を通した光が、急に

げってきた。夕立がくるのかもしれない。桶がさつきよりずっと大きく見えて、のしかかっつきそうなのがする。

たいこに遠い雷の音がまじった。どこからか、風が吹きこんできた。

シノは、びくつとした。聞いたことのない声がするではないか。

「だれか、いてるの?」

返事はない。一瞬、風も雷もたいこの音もとぎれた。が、すぐに声だけが、前よりはつきり聞こえてきた。

いろいろな高さの音が重なっている。

六甲おろしが吹くとき、こんなふう聞こえることがある。けれど、夏に六甲おろしは吹かない。

「だれやの!」

だれかが、歌をうたっているようだ。

お日はちりちり やまばにかかる

わしのしごとは こやまほど

シノのひざは、がちがちになった。

ねむい ねむたい こうねむとては
ながのふゆじゃが つとまろか

歌声は、だんだん大きくなっていく。

けさのさむさに あらいばんはどなた
かわいとこのさの こえがする

いきなり頭の上で、ばたばたと音がした。
夕立の雨音とは、とても思えない。

(まものや! まものが二階であばれとんの
やわ)

二階へわたしてあるはしごから、いまにも魔物がかけ降りてくる気がする。見たくもない魔物の姿が、シノの頭に浮かんでしまう。なぜか狛犬そっくりだ。

(まものが、どこかでうちをにらんでる。

『はよう、いね！』ってほえてはる)

シノは震えだした。

そして、何もわからなくなっちゃった。

それっきり、シノは、ヤエちゃんの家へ行けなくなつた。

柿の実が赤くなり始めた。そろそろ丹波から、とうじさんたちが酒造りにやってくる季節だ。

「きょうは、うちとこであそぼ。ええことあんねん」

ヤエちゃんは、シノを無理やり連れ出した。夏祭りの日から、シノはいつペンも、ヤエちゃんの家に行こうとしなかつた。ヤエちゃんに引つ張られながら、シノは口をとがらして、しぶしぶついていった。ヤエちゃんの下駄ばかり見ていたので、道が後ろへすべっていくようだった。

ヤエちゃんの家に入ると、おばちゃんが、「よう、おこし」と、にこにこして出てきた。

ヤエちゃんは、いそいそとままごと道具とお人形を抱えてきた。

おばちゃんは、

「ほれ、風邪ひいても知らんよ。見てみ。シノちゃんは、ちゃあんとあつたこう着てはる」と、赤いメリンスの綿入れを、ヤエちゃんの肩に着せた。それから、コンペイトウやかすてらやきを紙に包んで、

「なかよう、遊びよ」

と、シノに渡してくれた。

お礼を言わなくてはとわかつているのに、言葉が出てこない。小さい子のように、ぺこんと頭を下げて、シノはほつぺたを赤くした。「シノちゃん、こつちや。はよう」

ヤエちゃんが酒蔵の前で呼んでいた。

そこには、たくさんの桶が、横倒しにされて、二列に並べてあつた。

町並みのひとすじくらい、ゆうに入りそうなほど広い場所が、ヤエちゃんが立つても頭が届かないほどの大きな桶で埋まっている。

それは見事な眺めだ。

この桶を、竹を細く裂いたササラで、ていねいに洗うのが、酒造りで一番初めの大切な仕事だ。

「おけあらい、まだやから、あそんでもええねん」

ヤエちゃんはそう言って、一番隅の桶の前で下駄を脱ぐと、桶に入った。シノもまねをした。中からは母屋が見えなくてほっとする。

ぶ厚い吉野杉の桶は、お日でぬくもって、ほっこり暖かい。

「ええやろ。ここ、わたしらのおうちや」
杉の木とお酒の匂いが、ほんのり残っている。

ヤエちゃんが、にぎりこぶしを、シノの鼻に近づけた。指の間から、シノのひざにこぼれたのは、キンモクセイの花だった。ままごとのおうちは、いい匂いでいっぱいになった。

瀬戸物の小さなお湯のみに、キンモクセイ

のお茶がつかれた。

「もつとええもん、あんねんよ」

ヤエちゃんは、前だれに手を入れた。

開いた手のひらのくぼみで、紫色の玉がいくつも、濡れたように光っている。

「わあつ、きれい。これ、なんやの？」

「ムラサキシキブの実い」

「なあ、これ、おじいちゃんがだいじにしてはるんとちがうの？」

「かまへん。鳥がつついてしてもた、いうわ。けど、『ヤエドリ』いう鳥やろ、つていわはるかもしれん」

シノは、くつとふきだした。それから二人とも、くつくくくつが止まらなくなってきた。大笑いをはまんしたので、桶はびくともしなかつた。

お人形を、桶の底を背にしてすわらせた。ちりめんのおふりそでのすそからはみ出した、うす紅色の足が、本当の赤ちゃんみたいだ。

「さあ、どうぞ、おあがり」

かわりばんこに小さなおはしでムラサキシキブの実をつまむと、お人形に食べさせた。

「ほらほら、こぼしたらあきませんよ」

ヤエちゃんは、ムラサキシキブの実を捨て、口に入れた。

「まねっこやで」

と、言ったけれど、キンモクセイのお茶は、本当に飲んでしまった。

「おじいちゃんなんか、このお花、お酒に入ればるよ。おめでたいときのお酒や、いうてはる」

ヤエちゃんは、シノが目をぱちくりするの
が、嬉しくてしようがないようだ。

そのとき、母屋の方から誰かがやってくる
のに二人は気づいた。がらごろと地べたをこ
する下駄の音が近寄ってくる。

「しーっ、兄ちゃんや」

ヤエちゃんが、人差し指を口にあてた。け
れどすぐ二人は、一太郎ちゃんに見つかって

しまった。

「ヤエ、またねずみが遊びにきよったか」

一太郎ちゃんがこんなことを言うのは、あ
の夏祭りの日、シノが酒蔵にいたのを、まだ
覚えているからだろう。シノは、まつ赤に
なつて下を向いた。胸がどきどき鳴った。

「いけず、いわんといて。せつかくシノちゃ
ん、きてくれはってんよ！」

ヤエちゃんが、ムラサキシキブの実を掴ん
で投げつけた。

「いてっ！ なにすんねん」

シノは顔を上げた。

ムラサキシキブの実は、一太郎ちゃんのあ
かんべの目に、命中してしまったのだ。左目
を抑えた一太郎ちゃんの顔が、みるみる赤く
なつてくる。

一太郎ちゃんが、桶に跳びこんできた。

（たたかれる！）

二人が思わず目をつぶったとたん、ままご
とのおうちがぐらっと揺れた。足と頭が逆さ

になった。

「やめてえな！」

ヤエちゃんが泣き出した。

一太郎ちゃんは、水車を廻す^{まわ}るように、桶の内側をぐいぐいと踏みつけている。

いったん廻り出すと、勢いがついてしまったのか、ままごと道具も人形も、そしてヤエちゃんとシノも、うすの中のお餅のようにひとかたまりにされて、桶の中をごろごろところがっていく。

そのときだった。

「いたいっ！」

シノが大声を上げた。おさげが、桶と地べたにはさまれたのだ。おさげが、ひきちぎれそう。頭も飛び出してしまいうさだ。

それでも、桶は止まりそうにない。

「どないしょ。止められへん！」

一太郎ちゃんまで、一緒にころがってきた。

シノの耳がぱーんとした。音という音が消えた。目の前が真っ暗になった。

ふいに、シノの体が、ふわっとすくい上げられた。誰かが、シノをつかまえている。

あまい匂いがしてきた。よく熟れた果物のような匂いだ。

耳のそばで、いつかの「まもの」の歌が聞こえてきた。

お日はちりちり やまばかか

わしのしごとは こやまほど

水のような声だ。ちろちろとせせらぎが、頭の中に流れてくる。

シノは「まもの」を探した。

(もう、こわがらんでええ。わいが、しつかりつかまえて。とびださんように)

小さい子どもの透き通った声がある。誰かがじつと見ている。辺りは真っ暗なのに、さかばやしのようないがぐり頭と、くりんとした目が、シノには見えた。

(かんにな)

「まもの」が言う。

歌声と匂いで、お酒を飲んだ人のように、シノの体が揺れてきた。お母ちゃんの背中に おぶわれているみたいだ。夢の穴が、ぼつかり口を開けた。シノは、吸いこまれるように穴に落ちていく。底のない穴なのか。どこまでもどこまでも、勢いを増して落ち続ける。

やがて、沈んでいくお月さんの緩やかさで、シノは、山の端に下り立った。

(ええにおいやね、まものさん)

(お米が、お酒になっていくにおいや。けどな、『まものさん』はやめてくれへんか。わいは『くらんぼ』や)

(くらんぼう?)

(くらにすんでるよって『くらんぼ』)

(ふふっ、けつたいな名あ)

いつの間にかシノは、布団の真ん中に、べたんと座っている。小さいころ、よくこうして、布団を敷いているお母ちゃんの邪魔をしたっけ。

(なあ、『ぶうらんこ』して)

(よっしゃ!)

布団ごと、シノの体が浮き上がった。

(ぶうらんこ、ぶうらんこ……)

シノは、小さい子になって、きゃっきゃっはしゃぐ。

(くうらんぼ、くうらんぼ……)

くらんぼが揺らす。ぐるんとぶらんこが宙返りした。

(おもしろいか?)

(うん、おもしろい!)

(こわいこと、ないやろ?)

(うん、なあんも)

ぐるんぐるんと、ぶらんこは廻り続ける。

ぶらんこには、もう一人誰かが乗っている。

(おんりしたい、おんりしたい!)

おかつぱの髪を揺すって、いやいやをしている小さな男の子だ。緋あかの着物に、どこかで見覚えがあった。木の実の形をした目は、今にも泣き出しそうだ。

(あれ、だれ?)

(いっちゃんや)

(あれが、一太郎ちゃん?)

(そや。いっちゃんは、自分からおけをまわしはったのに、なんでこわがつてはるんやろ)
(くらんぼさんが、いっしょになって、おけをまわしはったんやろ)

(へへっ。目えさましたら、あんたがおるやないか。うれしなつてな。『わいもいれて』いうたけど、いっちゃんはきこえてはらへん。だまって、なかまにいれてもろた)

(せやから、おけがとまらんようになったんやわ)

くらんぼの歌は、まだずっと続いている。

(おはなししながら、歌もうとてはんの? いくつも声、もつてはんねんね)

(あんたらかて、そやろ。きこえる声と、きこえん声、もつてはる。きこえん声のほうが、ほんまのことというてはる)

(けど、いっぺんにきこえてしもたら、なん

やらようわからん。この歌、まえにきいたとき、びっくりしたわあ)

(あんときは、わいもびっくりした。女の子をみたん、はじめてやつたさかい。女の子つて、こないかいらしもんなんか。歌でもうとたらよろこぶやろか、おもたんや)

(酒ぐらのばん、してはってんね)

(そや。酒づくりにあわせて歌うたうんが、わいのおつとめや。酒づくりは、さむいじきに、朝はよからせんならんやろ。夜なかかてゆっくりねてられん。わいの歌がのうては、体もよううごかんねん)

ねむい ねむたい こうねむとては

ながのふゆじゆが つとまろか

(それだけやない。ひとまわりうとたら、しごとがどこまでいったか、わかるようになってんねん。ええがげんにうとては、ええ酒がつくれんのや)

(歌には、ちゃんとわけがあるねんね)

(わけがあるもんはのこつていく。わけがないもんはのうなつていく)

けさのさむさに あらいばんは どなた
かわいとのさの こえがする

(これも、なんかわけあるのん?)

(あんねん。おけあらいの歌や。わい、これ
がつろうてな。わすれられん)

(おけあらうんが、そないつらいん?)

(夜なかの米あらいより、なんぼか楽やけど
な。にえつたつた湯うつかうさかい、酒ぐら
んなかで、いちばんこわいしごとや。あれは、
いっちゃんはまだ、よちよちあるきのころ
やった。ひとりであらい場へきはつてな
……)

急にくらんぼの声がふるえた。

(大やけど、してしもたんや)

そう言つて、ふつと声も歌もとぎれた。

くらんぼがひらりと地べたへ飛び下りたの
が、シノにはわかった。

きしんだ音をたてて、桶が止まった。くら
んぼが下敷きになつて止めたのだった。

ヤエちゃんが泣きながら、はだしで母屋へ
走つていった。お人形の首が抜けて、割れた
ままごとのかけらが散らばつていた。

おさげを引つ張られたあとが、まだじんと
していたが、シノは、お人形の首を上げて、
髪をといてやつた。

一太郎ちゃんがあごを上げて、鼻をすすつ
ていた。紺がすりの胸が、ひくひくしている。
(ないてはる……)

シノは、一太郎ちゃんの目を、初めてじつ
と見つめた。さっきの小さな男の子の目が重
なつた。

ヤエちゃんが風邪をひいて、それからしば
らくは遊べなかつた。久しぶりに誘いにきた

ヤエちゃんは、喉に白い布を巻いていた。焼いたネギの匂いがした。酒蔵の通りに、二人の下駄がかたかたと踊っていく。

「シノちゃん、もうきてくれはらへんかおもてた。よかつたわあ。新しいままごと、買ってもらたけど、ひとりやったらつまらん」

シノは、ヤエちゃんとないだ手を大きく振った。

ヤエちゃんの家へ行くと、酒蔵にはもう、とうじさんたちがきていた。

酒蔵は、半年の眠りから目を覚ましていた。酒蔵の道具の何もかもが、息を弾ませている。その匂いでむせかえるようだ。

酒蔵の前では、きれいに洗った桶が、ずらりと干され、出番を待っている。春が過ぎるまでもう、桶の中では遊べない。

（くらんぼは、どうしたやる。おけにしかれて、死んでしもたんやるか？）

「お日はちりちり やまばにかかる

わしのしごとは こやまほど」

酒蔵から、とうじさんたちの歌声がする。

（くらんぼは、きつと、死んだりせえへん）

シノは、はつきり聞きとっていた。とうじさんたちの太い声がかぶさっても消えない透き通る声。風が、ぴんと張った細い糸を弾くようなその声は、間違いなく、くらんぼの声だった。

母屋に上がって、薄い火の残った火鉢のそばで、ままごとを広げたときだった。

障子に、ほうつと影が映った。影は、障子の前で止まったまま動かない。

一太郎ちゃんだ。

ヤエちゃんは、ちらつと見たきり、知らんぷりをしている。

シノは、ヤエちゃんの耳に口を寄せて、そつとささやいた。

「ええつ、ほんまにええの？」

ヤエちゃんが驚いて大声を出した。

シノは、こっくりした。

ヤエちゃんが障子を開けた。湯気の立つお

皿を持って、一太郎ちゃんが立っていた。

「とうじのおっちゃんが、『これおあがり』って」

炊きたてのご飯の匂いに混じって、こうばしい匂いがしている。

「わあい、おこげや！ ままごとのごちそうにしよう」

ヤエちゃんは、ばんざいをした。そしてすぐ、さっきの内緒話を、そのまんま伝えてしまったのだ。

「シノちゃんがな、兄ちゃんに、『お父さん』になってもらわへんか、いうてはる」

シノは、膝の上で組んだ両手を握りしめた。

一太郎ちゃんは、もじもじしている。

シノの膝の前に、おこげのお皿がすいと差し出された。ふわっと顔に湯気が上がってくる。

「おおきに」

それは、シノが初めて一太郎ちゃんに話せた言葉だった。

あつあつのおこげをほおばった。お米のあまみに、薄い塩味がいい具合にとけあっている。

「ほいひい！」

口いっぱい、「おいしい」がうまく言えない。

一太郎ちゃんは、まるで自分がおこげを造ったようににっこりした。

「ただのおこげとちやうやろ？ おっちゃんら、ごつつうおつきいかまで、ごはんたきはんねん。そやから、おこげもごつつううまいんや」

そう聞くと、おこげがもっとおいしくなってくる。

「そや！」

ヤエちゃんが、手をぱちんとたたいた。

「なあ『お父さん』、おこげ、火ばちであぶってくれまへんか。シノちゃんに食べさせたげたいわあ」

「よっしゃ。わい、炭ついだるさかい、ヤエ、

あみとおしよゆう、もつてきて！」

「お日はちりちり やまばにかかる……」

歌が聞こえる。

シノの胸にも、ちりちり燃えるお日さんが、
すべりこんでいった。

《優秀賞・学齡児童生徒の部》

小説部門

青空クレヨン

鈴木 優真

僕は鳥のさえずりと眩^{まぶ}しすぎる太陽の光で目が覚めた。

「はーあ」

僕の今日初めての声だ。体がなんだか軽い。

ベットから降り、部屋を出て、階段を寝ぼけた体が僕をケガさせないように、ゆっくり足を運んだ。

この家の造りは少し変わっている。階段はリビングと直結している。だからこっそり部屋に戻ることができない。親と喧嘩^{けんか}したらど

うしよう。なんていつも思う。そんなことを考えながら、いつの間にかフライパンの前にいた。

今日は土曜。時計の針が九と十二を指している。

「九時か」

母さんは妹の親子活動、父さんは出張、だから家には僕しかいない。この広いリビングに一人はもったいない。この僕の考えを無視するように手が口にパンを持っていった。

二十分ばかりかかったので、僕は少し急いだ。なぜなら、土曜なのに学校へと行かなければならないからだ。正直だるい。しかも、春休み。みんなは部活が一週間休みだ。こんな嫌なことを考える無駄な時間が長いほど靴を履こうとする僕の足を止める。

結局、僕は足を止めようとする意思をどうにか押しとどめ、もう学校の校門前にいた。

三週間ぶりの登校。校内は所々ほこりがたまっていた。久しぶりにシューズを履き、久

しぶりに校舎を歩き、部室の前に立った。部室の看板は相変わらずカラフルで派手だった。そこには物静かで絵を描くのが好きな僕にはお似合いの『美術部』と表記されている。

「よっおはよっ」

弾むような声で言われた。振り返ると、美術部にはあまりお似合いではない美人さんが立っていた。まあ毎日会っている美術部の部長であり、幼なじみでもある。

「おはよ」

僕は静かにこたえた。

「あっそういえば……」

彼女は少し下を向き言いくそうに言った。これはもしかすると「告白」と思っていると彼女はまた口を開いた。

「シューズどうして捨ててるの？」

もうすこしドキドキを味合わせてくれないなあ、という気持ちに疑問がくわわった。目は足を見ていた。

「今、履いてるけど」

すると彼女は「はあっ」とため息をついた。

「私がつっているのは、体育館シューズ」

「あっ」

それでも謎だ。僕は捨てていない。となると誰かが捨てたことになる。でも僕は気にしなかった。これが始まりの合図だともしらずに。

次の日、僕はまた同じ時間に同じ場所に入った。そして、彼女と言葉を交わした。

「おはよ」

「おはよ」

僕はいつものように部室の扉に手をかけ、鍵をさした。

「うんっ？」

鍵が回らない。

「どしたの？」

「鍵が開かないんだよ」

すると彼女はドアノブをもちゆっくりと回した。それと同時に僕らは何かを悟った表情で顔を合わせた。

「開いてる」

何かを悟った僕の体が部屋へと走らせた。

「これは」

目の前に広がる光景は僕の心を空っぽにした。僕の筆は数本おられ、僕の絵はほとんどやぶられ、僕がとった賞の盾は一つ残らず床に落ちていた。

僕のだけだ……。

僕は気づいた。これは美術部目当てじゃない。僕への嫌がらせだ。

次の日、僕は朝早く目が覚めてしまった。

時計の針は五と十二をさしていた。

「まだ五時、ねっむ」

別に昨日のことが心配で不安で起きたわけじゃない。普段からあまり感情を見せることのない僕は少し心には引つかかるがあまり気にしていないかった。

僕は一度起きてしまうと、寝ることができないので仕方なくベッドから体を起こすことにした。二度寝がないので遅刻はしない。

ぼやけた視界を目をこすりながら直し、せっかくの早起きだからという理由で朝食の前にジャージに着替え、右手にスケッチブック、左手に鉛筆を持って玄関を出た。

「あー最高」

少し肌寒い風と、心を落ち着かせる小鳥のさえずり、遠くを静かに走る電車の音、うすい雲が少しかかる空。このまま時間を止めたいくらいだ。

この時間を止めたいくらい気持ちいい朝に、家の前にあるマンションへと向かった。ここは昔からの僕にとつての遊び場でもある。だからこの場所は熟知している。

いつものように長く続く階段をゆっくりと歩いた。そりゃそうだ。十階に用があるんだから。でも、今日は足取りが軽い。そのおかげで屋上までは二分ぐらいで着いた。

「あー疲れたー」

足取りが軽いと言ったものの階段を上がるという作業はしんどい。人間はなぜ下るより

上がるほうがしんどいと感じるようになってくれているのだろう、研究したいくらいだ。そういう思いながらベンチに座りスケッチブックを広げた。

「よっ」

「うわっ」

いきなり声をかけられ驚きとともに、さっき開いたばかりのスケッチブックが閉じた状態になって地面へ落ちた。

「もっもー、何してんの？」

僕はこのふざけた言い方で僕の名前を呼ぶ人を知っている。美術部の部長であり、幼なじみでもある彼女だ。

「なんだあ、緑か、驚かせるなよお」

「なんだとはなんだー、せつかくもがスケッチブック持って屋上行くの見かけたから来てやったのに」

ここが遊び場になっているのも彼女のおかげだ。だがこんなに偉そうに言われると少し嫌になる。もう慣れてるけど。

「はいっ、もも」

彼女は驚かせたことを悪く思ったのかスケッチブックを僕の手に渡した。それと同時にスケッチブックの表紙の名前を見て、

「十七年間も一緒にいて今頃聞くのはなんだけどお「桜井もも」って、名前だけ聞いたら女の子だけど、どうしてこうなったの？」
彼女は僕の少し痛いところをついた。このことはあまり人に話したくないけど、なぜか彼女になら話せる気がした。

「母さんは僕が生まれる前に女の子を授かってたんだ。父さんともう名前まで決めてた。だけど……母さんが重い病気にかかって赤ちゃん自分の命を選ばないといけなくなつたんだ。そして赤ちゃんは諦めた。でも母さんは自分がこの子を死なせたと自分立ち直れなかつたらしい。その思いが強かつたのか、僕が男でも女でも赤ちゃんの名前は「もも」になつていたんだ」

「そうなんだ……。ごめんねっ、変なこと聞

「いちゃって」

正直このこと誰かに話したかった。だから「ごめんねっ」の言葉は必要なかった。

僕たちはスケッチをすることを忘れ話し込んでいた。気づけば七時のチャイムが町全体に鳴り響いていた。

「やばいっ遅刻する」

「どこに?」

「はあ! 部活に決まってるでしょうが!」

「あつ……」

すっかり忘れていた。そんなに慌てなくても部員は基本僕達二人だ。他の部員は他の部活と掛け持ちをしている。だから美術部に顔をのぞかせるのは週二回程度だ。

「ほらっ! 行くよ!」

彼女はその言葉とともに階段へ向かって走っていった。僕も彼女の背中を追って走った。

僕は一度家に帰った。急いだせいで涼しいはずの今が暑く感じられた。大した用意はい

らないので、もう一度玄関で靴を履くのに分かからなかった。

僕は毎日のように歩く桜の咲く川沿いを歩いてきた。この桜も少し見飽きた。桜をイメージすると、この桜が頭に浮かぶほど。頭にイメージをわかしていると、冷たくほんのりといい香りの風が吹いてきた。目をつぶり体で風を感じていた。やがて風がなくなると同時に桜の木一本分前にいる男の子と目が合った。その彼は青いカーディガンに落ち着いた色のジーパンをはいている。

「うっ」

一瞬だけが頭がくらっとした。

「大丈夫?」

すると彼は少し慣れ慣れしい言葉遣いとともに僕に近づいてきた。

「ぼく遙風白です」

「はるかぜ……はく?」

出会って数十秒、挨拶の前に自己紹介をされたのは初めてだ。しかも、初めて聞く名前

だ。

「いきなりごめんねって、ここ最近この道で毎日すれ違ってるよ」

全く覚えていない。この時、僕には注意力がないという反省点が見つかった。

「ごめん。覚えてない」

そりゃそうか。でもぼくは君に生きてもらうよ。ここまで来たんだから。

彼とはなぜか息が合いそうな気がした。その安心感に身をまかせ、

「僕、桜井もんです」

この初めて聞くと？ がわく名前を伝えた。

「ぼくたち変わった名前どうしだな」

彼はこの名前の意味を自分もということまで聞かなかった。

「白、学校は？ 何高校？」

「うーん今はときどき行ってる」

「そうなんだ」

彼は何かを隠したいことがあるかのような顔ををした。

「じゃあー好きな色は？ 食べ物は？ 部活は何をしてるの？」

「好きな色は水色でー好きな食べ物はロールキャベツ。部活は美術部かな」

僕と全で一緒だ。そういえば確かに僕と同じようなオーラがただよっている気がする。オーラを感じながら僕は目を腕へと向けた。

「あつ、やばい！ 遅れる！」

腕時計の針は集合時間の五分前をさしていた。

「わかった。じゃあ、多分また明日」

「うん。じゃあつ」

僕は学校までの一本道を全力で走った。もちろん遅刻となった。

次の日、僕はまた彼と出会うことができた。

「昨日の多分いらなかったな」

「確かに。フンっ」

彼は少しの笑みを浮かべ笑った。今日の彼は白いジャケットに赤いズボンを身にまとうていた。それに昨日と同じオーラ、雰囲気、も身にまとうていた。

「今日は遅刻しない？」

彼の口からズキッとくる一言を言われた。

「大丈夫だって」

確かに大丈夫だ。集合時間のまだ三十分前だ。今日は彼と何を話そう。

「白だったよな？ 好きな場所は？ 風景は？」

とりあえず名前の確認と昨日の質問の続きをした。

「屋上から見る景色」

また一緒だ。正直ここまで一緒だと少し怖くなってくる。

「わかるーその気持ちわかるー」

すると彼は強い笑みを浮かべてうなずいた。

「ぼく小さいころから父さんに「どこ行きた

い？」って聞かれると「屋上っていつも答えてたらしい」

「小さいころからって。危険だよ」

君はそのうち気づくだろう。屋上に好きでもないのに行く理由を。

僕の腕時計の針は集合時間の十五分前をさしていた。

「あつごめん、今日は汗をかいて登校したくないから、そろそろ行くわ」

「うん。行つてらー。また明日」

僕は焦らず一歩一歩、足を進めた。進めながら思った。

「彼は何者なんだろう」

次の日、僕は一時間も寝坊をした。昨日の夜、彼のことを考えすぎて眠れなかった。緑には話してある。一応部長だから。

玄関を出て春なのに汗だくになることを覚悟で走った。

「まあ遅刻ですか」

思わずこの声に足を止めてしまった。

「白ーなんているの」

「いやー散歩してたら、偶々たまたま見かけたものだからー」

散歩にしては都合がいいと思った。

「あっ急がなきゃ」

すっかりと遅刻を忘れていた。

「じゃあ、ほくも一緒に走ってあげる」

彼はわざわざしんどいこと一緒にすることを選んだ。この時、彼はもう友達と呼んでい気がした。そして遅刻が分かっているながら一緒に学校までの道を笑いあいながら走った。

それからというものの、僕たちは友達を超え親友となり、次の春まで毎日のように会っていた。でも、一つだけ変わらないことがあった。どんな質問をしても僕と同じ答えを返してくることだ。なぜか聞いても「偶々じゃないの?」と返される。本当に偶々ならいいけ

ど、僕は彼には秘密があると感じていた。

「ようっ、おはよ」

「おおー今日はいつもよりきまってるねー」

「そりゃそうだよー高校生活最後の新学期なんだから」

そう今日は四月七日。今日から三年生としての一年がスタートする日だ。彼の始業式は明日だと言っている。

学校に着くと周りには久しぶりの制服姿の学生がいる。とつても新鮮だ。僕は心が明るいまま玄関を通った。そして教室に着くといつもの友達に「おはよっ」と明るく声をかけた。でも、返ってきたのは暗い「おはよー」だった。軽蔑はせずにただ暗い返事をされただけだった。

自分の席に座るとき少し違和感を覚えた。

「椅子の脚が曲がってる」

これは明らかに人が曲げたものだった。

「あーごめん。もうその席、空っぽだと思ってたー」

三人の男子が僕の目の前に立っていた。

「お前」

真ん中にいる男子に見覚えがあった。

「天野、お前なんでここにいるんだよ。一年で転校終わりか」

そう天野は去年の春休み家庭の事情で遠くへ引っ越していた。去年の春……休……あつ。僕は去年の記憶と今をつなげた。

「じゃあ、去年部室の僕のところだけ荒らしたのはお前か」

「さあな」

僕の読みは当たった。天野は去年、部室をめちゃくちゃにした犯人だ。お前がいなくなつてからあのようになつたのはそういうことかと思つたのと同時に、僕はこれからいじめられるのだと覚悟した。

「もうお前の周りにはみんな敵だと思え」

僕は周りをながめた。確かにクラスの半分は暗い顔で僕のことを見ているのに助けようとする気配はなかった。また、半分はこのこ

ととは無関係な人たちだ。多分天野に支配されている。天野は残りの半分も支配するだろう。友達も。友達はまだ支配されていない。

僕は放課後とにかく考えて歩いた。この先どうしよう。僕は天野に今のままでは勝てない。力は天野の方が圧倒的に強い。正直、明日が来るのが怖かった。

次の日、今日もいつもの場所で白と言葉を交わした。

「よっおはよっ」

「おう」

明るく返すことができなかった。

「なんかあった？」

さすがは親友。「おう」の二言だけで見ぬかれた。でも、親友だからこそ教えることはできなかった。

「いや、なんでもないよ」

「あつそーあつごめん。始業式に遅れるから行くわ」

珍しく彼から別れの言葉を言われた。彼は

駆け足で去っていった。

「制服着なくていいのかな」

「ごめんな。君にはもう少しだけたえてもらうよ。まだ消えたくないんだ……」

僕は学校の玄関を抜けて教室へと向かった。ここまでは何もなかった。教室に入ろうと足を進めると何かに足がひっかかった。その後、僕はうつぶせで床の上にあった。

「痛っ」

「いやーごめんねーちょうど足があたっちゃった」

確実にわざとだ。今日の学校生活はこれから始まった。それから放課後までは、ノートがなくなったり、けられたり、ものをこわされたたり、名前をばかにされたり、散々な一日だった。

こんなことがもう二週間も続いた。クラスのは半分はすべて天野に支配され、友達もすべ

て敵となった。でも、白だけは親友として接してくれていた。

今日も居場所のない学校へと向かった。学校の先生に頼ることはあまりしなくなかった。自分の力で解決したいという気持ちと、いざとなると怖くなるという思いがあるからだ。

今日もいつものようにひどい扱いをうけた。もう体はあざだらけだ。心は傷だらけだ。

放課後、学校の校門を出ると母さんが不安そうな顔をして待っていた。

「なんで母さんここにいるの？」

「もも大変よ！ 緑ちゃんが階段から落ちて意識不明の重体だつて！」

「ええっ」

僕は病院に向かって全力で走った。いじめよりも何よりも怖かった。毎日のように一緒に生きてた人がいなくなるかもしれない。僕は自分の体の痛みを忘れて、心の傷も忘れて

彼女のもとへと向かった。

病室の前にはちゃんと「空中緑様そらなかなを」と書かれていた。胸の鼓動が早くなり震えながら中へと入った。そこには病院の器具がたくさん体に取りつけられ眠っている彼女の姿があった。隣には彼女のお母さんがいた。お母さんは僕に彼女について話してくれた。聞いて後悔した。彼女が目を開ける可能性はかなり低く、意識が戻っても体が自由に動けるといふ保証はないと聞かされた。

僕は彼女の今の顔を目にやきつけ病院をあとにした。帰り道、涙が止まらなかった。ちかくにいる人がいなくなるというのは、どんなひどいじめよりも心に傷を負った。僕はひとりになった気がした。

「おいっ、何一人で抱え込んでんだよ」

突然後ろから声をかけられた。毎日聞いている声だ。

「白」

振り返ると僕と同じオーラと雰囲気身を

まどつている彼がいた。

「よっ」

「白、なんでいるの」

「なんでつてー偶々?」

いつもこうだ。彼にどうしてここにいるのか聞くと「偶々」とか「偶然」って答える。だから何かあると思つて聞けなかった。聞いたら僕たちのこの関係が変わってしまうと思つたから。でも、もう何も怖くない。これまでより怖い出来事なんてない。そう思つて彼に聞いてみた。

「なあ、白。いつも僕の居場所が分かるのかのように同じ場所に出てこられるの? 何か隠してるの?」

すると彼は微笑みながら下を向いた。

「はあーいよいよ話す時がきたか」

どうやら僕の勘は当たつていたらしい。彼は何かを隠していた。初めて聞く彼の秘密に心臓の鼓動が早くなった。

「ぼくは君を救うため未来から来た」

「え？」

僕には意味が分からなかった。

「君は今いじめられてて、幼なじみも危険な状態になった。このこと隠してたらしいけど、ぼくはずっと前に知ってた。そして君が今からどうなるかも知ってる」

彼はとても言いにくそうな顔をして僕の目に真つすぐな視線をおくった。

「君は……」

「もうすぐ死ぬ」

体が一瞬にして氷ついた。この十八年間が終わる。そんなこと信じられなかった。怖いどころじゃない。「死ぬ」これは誰でも起こること。唯一、百パーセント確実な未来。いつくるかもわからない。明日かもしれない。百年後かもしれない。そんな恐怖を人々は気にもせずに生きている。でも、今はとにかく信じられない。だから彼に聞いてみた。

「ほんとに？」

「ああ。君は今年のどこかの十二時に死ぬ。」

自分の意志で。そして、ちょうどその二百年後にぼくが生まれる。ぼくは未来で君と同じようにいじめられてたんだ。そして自殺を考えた。川に入っておぼれようとしたんだ。でも、おぼれようとした直前に不思議な雰囲気のおばあさんに止められた。その後、ぼくに、『お前はまた死ぬな』と言い、おばあさんは語るようにぼくに向かってしゃべった。『お前の前世も同じようなことをしてた。だが、お前には生きてまだすることがある。それはそのうち分かる』しかも、ぼくはこれから先、この前世の人のおかげで生きていけるが罪悪感をもって生き続けることになるよと教えられた」

「えっ」

まだ信じられないことばかりだ。でも、彼の目は嘘をついていないと証明するかのようになんて真剣なまなざしだった。

「でも、なんでわざわざ僕を救いに来たの？」

「ぼくがおばあさんと出会ってから九十年の

長い月日がたった」

「でも、君は十八歳じゃ？」

彼は僕の言葉に少しうなずいた。

「その九十年、ぼくは家族をもった画家として生きてきた。失敗ばかりで妻にいつぱい迷惑をかけた。でも、そんなある日。ぼくは友達の家の大掃除を手伝いに行った。倉庫の中を掃除してたら、薄く大きめの箱を見つけた。その中には一枚の古い絵が入ってた。気になったからその絵を友達からもらい、きれいにして、自分の店のインテリアとして置いた。そしたら、一人の男性がこの絵に目をつけ『これは君が描いたのかね？』と力強くぼくに向かって問いかけた。ぼくはとっさに『はい』と答えてしまった。それから、今まで売れなかつた、ぼくの絵もとぶように売れ、ニュースにもなった。そして、ぼくは有名になり画家として生きていけることになった。でも、嘘をついたことに罪悪感を感じて謝罪することとはできないか考えた結果、あの絵を描いた

人に恩返しをすることにしてこの時代に来た」

「それってまさか？」

僕はゆっくりと息をのんだ。

「ああ。その絵を描いたのは君だ。それに、ぼくの前世も君だ」

僕は彼の言葉に二つの意味を持った。来世の世界で認められる絵を描くことができる。でも、僕はもうすぐ死ぬ。思いが複雑すぎて壊れそうだった。

「ぼくは百歳をすぎて、もうすぐ死ぬ。だから二年だけ子どもになれる薬を飲んでタイムマシンで来た」

彼の長々した話はようやく終わった。でも、話は全て頭の中に残ってる。多分、死ぬまで忘れないだろう。そろそろだけど……。

複雑、悲しみ、恐怖、うれしさ、心の中は右往左往していた。いつ死ぬかわからないから今日は白を僕の家へ泊めた。

次の日、僕は普通に学校へと登校した。や

はりいじめを受けた。今日は集団ではこぼこにされ、最後に緑の悪口を言われた。僕のせいで緑が悲しむなら……。

「もも、あいついったい何してんだ」

ぼくは、ももの忘れたお弁当を持って学校へ来ていた。もう一時間も待つてる。この時背すじに寒気が走った。

「まさかあいつ……」

僕は長い階段を上がり思い出の屋上にいた。

僕は今日ここで人生に終止符をうつ。苦しくて、辛くて、誰かを傷つける、こんな僕は嫌だ。年内に死ぬと分かっているから、もう今日でいいや。腕時計は十一時五十五分をさしていた。

「そろそろか」

僕は屋上の柵をこえ、あと一步で落ちる場所まで十二時を待った。僕がいなくなれば天野

やその仲間も喜ぶだろう。緑も守れる。これで人の役に立てると思った。

「おいっ！ 何やってんだ！ もも！」

「白」

この声に泣きそうになった。白は汗だくで、息が切れていた。

「まだ、死ぬな！ 今助ける！」

「来るな！」

優しくしてくれている白に強く言ってしまった。

「だめだ。ぼくは君を助けて、君に幸せになってもらうんだ」

彼の言葉をはじくほど僕の気持ちは固まっていた。そして、言い返した。

「なんでだよ！ 僕を助ければ白は生まれなくなるんじゃないのか？」

「ああ。ぼくは、遥風白は、この世界でも、未来でも存在すらなくなる。それでも君を助けたい」

彼の言葉に嘘はない。彼は自分を犠牲にし

てまで僕を助けようとするなんて……。

「なんで自分を犠牲にしてまで？」

「人は誰かの犠牲の上で生きてる。親は自分の時間を犠牲にして子どもを育ててる。本当は生まれるはずだった君のお姉さんの犠牲のおかげで君は生まれることができた。君だつて今、幼なじみのために、そこから落ちようとしているだろ。人は人のために生まれてきた、ということだ。そして、ぼくは君に恩返しをしなくちゃならない。ぼくは十分生きることができた。君の犠牲で。だから今度はぼくが君のために犠牲になる。でも、辛い。これで平等という天秤がつりあうから。この天秤が全ての人にあれば、いじめや差別などの人権の侵害なんてなくなるのにな」

彼の「人は人のために生まれてきた」「平等という天秤」という言葉は僕の体を柵の中へと戻した。それと同時に時計の針は十二時をさした。白の体が薄くなつてきている。

「白！」

涙が止まらない。でも、彼は満足した顔でにっこり笑っていた。

「ぼくなら大丈夫。また生まれ変わるよ。虫でも、花でも、人間でも。そんな心配そうな顔するなつて。ぼくは白だよ。何色にもそまるよ。きつとどんな未来でも、空でも、生きていくことができる。だから安心して」

彼の姿がどんどん薄くなつていく。

「ありがとう。白。僕は生きるよ。そして、人のために生きるよ」

「君なら大丈夫。自分の未来を描くことができるよ。この青空のようにひろい可能性があるから」

「うん」

僕は彼の目を見て、大きく、強く、うなずいた。そして彼はこの青空にむかつて消えていった。

次の日、天野がまた僕に殴りかかってきた。でも、足を滑らせ天野は階段から落ちた。普通なら、ざまあみろと思うが、逆に助けた。

白に言われた「人は人のために生まれてきた」の言葉をまず、僕がしないと誰もしないから。天野は黙ってその場を去っていった。まわりで見ていた天野の仲間も僕の行動を見て黙っていた。

次の日、僕をいじめてた天野とその仲間が僕に謝ってきた。これが平等の天秤なのかな。そうだとしたら、僕は人の心に平等の天秤をつくることができたよ。白……。

僕は二十四歳になった。車椅子生活の妻と一緒に画家をやっている。僕は画家という夢を追いながらスクールカウンセラーを仕事にしている。「人は人のために生まれてきた」という言葉を胸に、困った人々たちを助けてる。

「あなたはどんな絵を描いたの？」

「この青空を描いたよ」

その青空には虹がかかっていた。

《優秀賞・一般の部》

随想部門

私の居場所と大切な人

村沢 綾乃

二〇一八年五月の終わり、もう死にたい、そう思っていた私にも居場所ができた。私に居場所をくれたのは福祉センターの職員だった。

また、おいで。俺は待ってるから。そう言ってくれた職員の笑顔が私を救ってくれた。誰にも認めてもらえず、必要とされていなかった私に手を差し伸べてくれた。この人を信じて、話してよかった。心からそう思った。福祉センターに居場所ができてから三ヶ月が経つ。初めはその人としか話せなくて、

他の人と自分から関わろうとしなかった私。でも、今は大切な友達もでき、他の職員とも話せるようになり、徐々に広がっていく私の世界。その中でも三人の職員と一番仲の良い友達nちゃんの存在が私を支えてくれている。今日まで来るのに、苦しいこともたくさんあった。ひとりではどうしようもないことも。でも、今、私が心から笑えているのは、三人とnちゃんがいてくれるから。

三人は、泣いてばかりの私のそばにいてくれた。バカやってしょうもないこと言っていて、いつも私を笑顔にしてくれる。私の話をちゃんと聞いてくれる。そして、私にいろんな言葉をかけてくれた。その言葉で私はいつも救われる。

自分で自分を傷つけたらあかん。

俺は本気で心配してる。

気にせんでいい。なんかあったら言つてや。

大丈夫。いつでも話聞かから。

たとえみんながあやのちゃんのこと嫌ってても、どうでもいいって思っても、僕はちゃうから。みんなと一緒にせんとつて。僕は味方やから。

僕は知ってる。いっぱいいいところあるつて。

えらいやん。みんなのことちゃんと考えられるの。

私は、優しきで溢あふれた温かい言葉を三人にたくさんもらった。三人の言葉は、私に笑顔になれる魔法をかけてくれる。

nちゃんはいつも私のそばにいてくれる。nちゃんの笑顔を見ると自然と元気になれる。誰も信じられなかった私は気がつけばいなくなつてた。もう、死にたいなんて言わない。自分で自分を傷つけたりしない。そう約束したから。

私、今すごくしんどい。でも、すごく幸せ。三人とnちゃんがいてくれるから。私にも心から笑える場所ができたから。信じられる人

に出会えたから。

ありがとうじゃ足りないくらい溢れてる感謝の気持ち。私は四人に何ができるんだろう。正直、わからない。私は、いつも助けてもらつてばかりで四人に何にもできてない。何にもできない自分が嫌で嫌で仕方ない。でも、今はまず、四人に甘えないでいいくらい強くなりたい。そして、四人に恩返しをしたい。

今の私の目標は、ゆつくりでいいから、自分の足で前に進むこと。四人みたいな優しいひとになること。人のために行動できるひと。人の心に寄り添えるひと。傷ついた人を包み込める温かいひと。人を笑顔にできるひと。

私は四人がいるから笑顔でいられる。四人は、私の笑顔の理由なんだ。そんな風に、私もいつか四人の笑顔の理由になりたい。

《優秀賞・学齡児童生徒の部》

随想部門

伝えることの大切さ

北垣 望咲

突然ですが、今一番大切な人、大切にしたい人は思い浮かびますか。家族、友だち、恋人、もしかしたら身近な人ではないかもしれませんが。思い浮かばない人は、隣や前後の人でも構いません。

もし、その人がとっぜん消えたらどうしますか。私は今まで、そんなことを考えもしなかったのですが、母が学生だった頃の話聞いて、考えが変わりました。

母は少しずつ私に話してくれました。

「お母さんが小学生やった時ね、同じクラス

に好きな男の子がおってん。でも、中学で離ればなれになってもて、もともと仲良かったから、よけい想いを伝えられなくて。そうしているうちに、あんたと同じ中学三年生の時に、その男の子、亡くなっちゃってね。なんでもっと早くに想いを伝えんかったんやろって、めっちゃ思ったなあ」

冗談っぽく、ちよつと真剣に話してくれた出来事は、いつも能天気な母が体験したとはとても思えない話でした。

私はこの話を聞いたときに、好きな人に限らず、大切な人には想いを伝えるべきだと心から思いました。そして、想いを伝えるというこの大切さが改めてわかりました。

「明日、大切な人が死ぬかもしれない。想いを伝えなきゃ」と毎日思わなくてもいいけれど、月に一回くらいはいつも照れくさくて言いにくいようなことを、口にして伝えてみるのもいいのではないだろうか。

毎日働いてくれているお父さん。しんどい

のにいつも笑顔でありがとう。いろいろ叱つてくれるお姉ちゃん。めんどくさい妹のことを考えてくれてありがとう。そして、大切なことを教えてくれるお母さん。産んでくれてありがとう。……私には大切な人がたくさんいます。これからはもつともつと想いを伝えていこうと思います。

《優秀賞・一般の部》

詩部門

野路菊と飛行機雲

松ぼっくりん

道端の野路菊の花に気づいたキミは
自分の意志で立ち止まる

以前のキミは 車椅子を押す人の意思で動い
ていた

野の花に気づいても近づけず

ゆっくり行きたくても叶^{かな}わなかつた

キミは本来 活発な子だったんだ

自分の意志で動けることが

キミに笑顔を取り戻させた

いつも背後から聞こえていた父の声を

横に並んで聞いているキミは

父の歩く速さに合わせて進んでいく

自信に満ちたキミの顔を見て

電動車椅子に変えて本当によかったと思う

思春期のキミは きっと反抗したいこともある
だろう

だけど

親子ゲンカをした後で

トイレの介助を頼まねばならないキミは

反抗することも 我慢している

「もつと わがまま言っつていいんだよ」と言

う父の言葉が終らぬうちに

「あっ あっちにも咲いてる」

キミの声が遮った

「キミの人生 自分の速度で歩んでお行き」

と眩^{くら}きながら空を仰ぐと 飛行機雲

キミは 振り向き父に言う

「父さん ほら 飛行機雲！」

《優秀賞・学齢児童生徒の部》

詩部門

こんどはだれかが

武田 奈々

お母さんと電車にのった

せきがあいていたのですわった

電車はこんできた

とちゅうのえきで、おばあさんがのってきた

せきはあいていなかった

おばあさんはつりかわにつかまった

近くにすわっていたお姉さんはスマホを見て

いた

お兄さんは、いねむりを始めた

だれもせきをゆずらなかった

電車がゆれた

おばあさんのうしろすがたが、小さく見えた
わたしのおばあちゃんみたいに見えた
「せきをゆずってあげなくちゃ」

わたしとお母さんは、せきをゆずった

おばあさんは、「ありがとう、ありがとう」

にこにこして言っていた

わたしもお母さんも、うれしくなった

わたしが、知らないおばあさんにせきをゆ

ずったみたい

こんどは知らないだれかが、わたしのおばあ
ちゃんやおじいちゃんにせきをゆずってくれ
たらうれしいなあ

《優秀賞・一般の部》

創作童話部門

竹さんは今夜も

石川 純子

戦争に負けてまもなくのころ。空襲ですっかり焼野原になった町に、奇跡的に残った商店街がありました。商店街の路地を入った所にちいさな靴屋があります。

靴屋の主人は竹三郎といって、みんなからは竹さんと呼ばれていました。竹さんは、とても頑固者で、商店街の人たちからけむたがられていました。

六十才の竹さんは、孫のチエちゃんと二人で暮らしていました。チエちゃんは、七才。

竹さんのお手伝いをよくしています。となり

のパン屋のおかみさんは、いつもいいです。

「チエちゃんは、えらいねえ」

「だって、来年は一年生やもん」

そういつて、チエちゃんは胸をはります。

「うちにも、あんな孫がいたらええのになあ。なんであんな頑固者の竹さんに、あんないい孫がおるんやろう」

といつて、うらやましそうにつぶやきました。

竹さんは、戦争に行つたまま帰つてこない、チエちゃんの父親の正一さんを待つていました。

「お父ちゃん、はよかえつてきたらええのになあ」

「ほんまや。チエのお父ちゃんは、のんきやから、まだ中国か南の島あたりでうろうろしてるとちやうか」

「ほんまや」

そういつては、顔をみあわせました。

竹さんは、腕のいい靴職人でしたが、戦争

が終わっても、まだ物が不足してまともな靴用の皮は、手に入りません。人々は、食べていくのがせいっぱいで、靴の注文をする人はいません。竹さんはその腕をつかって靴の修理をはじめました。竹さんにかかる、どんなボロ靴でも見事に修理して新品のようになるので、それなりに仕事はありました。

「やれやれ、いつまで靴の修理だけせなあかんのやろな」

竹さんは、そういうとため息をつきました。

十二月になると、焼け跡の商店街にも、さやかなクリスマスツリーが飾られました。

チエちゃんは、ツリーにすっかり夢中です。

夜。カーテンを閉めると、竹さんのお楽しみ時間がはじまります。竹さんは、だれにも内緒でかくしてある、チョコレート色の牛革を押し入れから出します。その皮は、息子の正一さんが帰ってきたら、靴をあつらえるためにおいてある、とっておきのものでした。

裸電球の下で竹さんは、古い毛布のきれはしで、キユツキユツとていねいにみがきます。

これは、みがくというより皮と、いや正一さんと会話をしているのです。竹さんは「早く帰ってこい」とお念仏のようにとなえながらみがいていました。竹さんが昔作った靴の皮ののこりでチエちゃんは、まねしてキユツキユツとみがきます。色も形もばらばらの皮は、まるで折り紙の切れ端みたいでした。

そんなある日のことです。町は、夕やけに赤く染まっていました。

表で、ガタガタッと大きな音がして、だれかが倒れ込んだような影が見えました。

「もしかして……」

竹さんとチエちゃんは、あわてて土間にとびおりて、引き戸をあわててあけました。

そこには、汚れた軍服を着た男が倒れていました。

「おい、正一、正一」

「お父ちゃん」

よく見ると、まったく知らない男でした。痩せこけて、目だけがギラギラと光っています。ほっておくわけにもいかないので、男を家の中に入れました。

竹さんは、台所にあつたなげなしの米で、ごはんを炊きました。味噌汁にはさつま芋と芋のつる。そして、今朝パン屋のおかみさんにもらつたチクワも入れました。家中にいい匂いが広がりました。奥の部屋で倒れこむように寝ていた男に竹さんが声をかけました。「おい、あんた起きろ。めしができたぞ」男は、いい匂いにつられたのか、のそりと起きてきました。

「さあ、食べて」
竹さんは、おわんにごはんをてんこ盛りによそいました。

チエちゃんも、竹さんのまねをして、「さあ、食べて」といいました。

男は、はらぺこだったらしく、おじぎをち

いさくすると、ものもいわないでガツガツと食べました。

「おいおい、そんなにいそぐと喉につまるぞ」しばらくして、男は二人がなにも食べていないのに気がつきました。

「すみません。一人で全部食べてしまつて」
「だいじょうぶ。ほらね」

チエちゃんは、ふかした芋を見せました。
「ところで、あんたはどこからの復員だね」

「自分は、フィリッピンからです」
「ご苦労さんでした。うちの息子はまだ帰つてこん。のんきものやから、おそらくどこかで道にでもまよつてるのかと思うてるんや」
男は、だまつて白湯を飲みました。

しばらくして、竹さんは男に靴の修理を教えることにしました。

「こんなご時世だから、腕に職を持つてると、食うぐらいはなんとかなる」

男は、もともと器用なたちらしく、どんど

んとうまくなつていきました。ヒゲをそると
なかなかの男前で、若い女の客もくるようにな
りました。チエちゃんは男を父親のように慕
つてそばから離れません。こうして、お正月
もすみ、やがて春になりました。

このごろ、なぜか男が話さなくなっている
ことに、竹さんは気付いていました。

花曇りのある日。

夕食のあとで、男は居住まいをととのえて
二人にいいました。

「長いあいだお世話になりました。そろそろ
おいとまをして、いちど故郷に帰ってみよう
と思います」

「そうか。そろそろ行くか？」

チエちゃんは、びつくり。

「あかん。行ったらあかん。ずっと三人でこ
こで暮らそうな」

竹さんが、チエちゃんにいいました。

「だれにでも、帰らねばならない所があるん

や。とめたらあかん」

「チエをおいて行くの？」

男は、だまって頭を下げると、奥の部屋で
荷造りをはじめました。

つぎの日の朝。

男は二人と顔をあわすと辛いので、だまっ
て出かけることにしました。すると、土間に
新品のチョコレート色の革靴が光っていまし
た。

うしろから竹さんがいいました。

「はいて行けや」

「でも、これは息子さんのための大切なもの
ではありませんか」

「ええから。あんたは、過去をふりむかんと、
まっすぐ行くんや」

男は、外をむいたままでいいました。

「お世話になりました。お達者で」

「ええから行け」

男は、靴をはくと、自分の足にびったりな

のに驚きました。きつと、竹さんが夜中に足の寸法をはかって縫ってくれたのでしょう。

竹さんは、男にもうひと声かけました。

「おまえの未来は、自分でさがすんやで」

男は、向こうを向いたまま、もう一度頭をさげると走り去りました。

「そういやあ、あいつの名前を聞いてなかったなあ」

竹さんは、ククッと笑いました。その日、チエちゃんは一日中泣いていました。

桜が満開のある日。チエちゃんは、一年生になりました。入学式には、皮の切れ端でパッチワークみたいに縫ったおしゃれな革靴をはいています。頭には、パン屋のおかみさんが入学祝いにくれた黄色いリボンがゆれています。

あれから、ずいぶんの月日が過ぎて、町は見違えるように美しくなりました。

チエちゃんは、今ではすっかりおばあさんになりました。だってあの戦争に負けた日から七十年以上の月日が過ぎたのです。竹さんも、パン屋のおかみさんも今ではもうなくなつて遠いお星さまになりました。

もうすぐ、孫のアヤネちゃんの入学式です。

昔、おじいちゃんの竹さんが縫ってくれたパッチワークの革靴をプレゼントしました。入学式に一回だけはいて、いつも手入している。今でも新品のような思いでの革靴。

「入学式、おめでとう。これは、アヤネちゃんのひいじいちゃんが、おばあちゃんにつくってくれた靴や。よかったらはいてみて」「かわいい！でも、わたしには小さくてはけない。弟のマー君ならびつたりかも」

アヤネちゃんのスラリと伸びた、長い足には白いスニーカーがよくあっています。

アヤネちゃんは、革靴を両手でかかえると、家に向かって帰りました。

「あらあら、マー君に入ればいいね。今のこ

どもたちは、体格がいいからびつくりや」

桜の花は、チエちゃんが入学したときとおなじように満開です。

そのとき、春風が吹いて、ひらひらと花吹雪が舞い散りました。おばあさんになったチエちゃんは、思い出を両手に抱きしめて、まだ自分にも残っている未来にむかって、ゆっくりと歩きはじめました。

《優秀賞・学齡児童生徒の部》

創作童話部門

白い町

川畑 実生

昔々あるところに、人も動物も、建物や地面でさえも、まっしろな町がありました。

その町に住む人達は、皆々白色が大好きでした。

赤色や青色は嫌だ。黒なんでもつてのほかだ。

いつからか、町から色は消えてしまいました。

でも、ある男の子は違いました。

その男の子は、白より青のほうが、だんぜん好きでした。

ですが、この町で青色が好きだと知られてしまったら、誰も自分とは話したり、遊んだりしてくれません。

友だちはもちろん、お父さんやお母さん、おじいさんやおばあさんまで、口をきいてくれなくなってしまうのかもしれない。

男の子は、それが嫌で、そんなに好きではない白い服を喜んで着て、白が一等好きだよ、と、友だちと言って笑うのでした。

そんなある日のことでした。

白い町に、一人の女の子がやってきました。

その女の子は、白い町に来てから、こう叫びました。

「まあ、何て面白くないでしょう！」

白い町の人は、自分達の町を面白くないと言ったその女の子を嫌い、誰も口をききませんでした。

でも、女の子が町を去ることはありません。

青色が好きな男の子は、その女の子にちよつぱり怒る反面、少し可哀そうに思っ

いました。

確かに、町の人たちのほこりを潰したことはない変わりありませんが、男の子も、面白くないと思っていたからです。

皆が女の子を嫌いになったのには、もう一つわけがありました。

女の子は、この町に来てから、ずっと赤い服ばかり着ていたのです。

そのせいで、どんなに優しい店も、女の子には何も売らなくなってしまうました。

女の子はいつも一人で、町の中をぶらぶら散歩していました。

白い皆の中で、その赤色の女の子はとて目立ちました。

いつか、男の子の友だちはいいました。

「あいつ、いつになつたら出ていくんだらう」

もう一人の友だちも、うんうんとうなずきました。

でも、男の子は首を縦には振れませんでした。

ある雨の降る日のことでした。

青い男の子は、ある空き家で赤い女の子が雨やどりしているのを見ました。

女の子は、ひどく楽しそうでした。

男の子は、おもわず空き家の開いた窓から女の子に声をかけました。

「どうしてそんなに、楽しそうなの」

女の子は男の子が顔を出す窓を見ると、にこりと微笑みました。

「だって、とっても綺麗きれいなんだから」

男の子には、女の子がなぜ綺麗きれいというのかちつとも理解できませんでした。

「雨なのに、灰色になるのに。どこが」

男の子は白い傘の柄をぎゅっと握って、少し声を大きくしました。

女の子はきょとんとして男の子を見ました。

「でも、まっしろでつまらないいつもの町より楽しいわ」

男の子の言うとおり、空はどんよりと灰色で、町の家々も雨で色が変わります。

けれど、女の子はまっしろのいつもより楽しいと言います。

「可笑しいよ」

「可笑しくないわ」

二人の声は、少しずつ大きくなります。

「白色が一番なのに、なんで」

そう言った男の子の顔は、くしゃりとゆがんで、今にも泣き出しそうです。

でも女の子は、悲しそうな顔をするばかりで、もう何も言ってくれませんでした。

男の子はあふれてしまいそうな涙を少し乱暴にぬぐうと、女の子に背を向けて、お家に走って帰ってしまいました。

男の子が消えた道を、女の子は窓から見ています。ふう、と、女の子は息を吐きながら窓の外へ手をのびました。

「白だけなんて、面白くないわ」

本当に。

「他の色があるから白は映えるのよ」

そんな女の子の小さな小さな一人ごとは、雨のざあざあという音にかき消されてしまいました。

「白が一番」なんて、わたしかあなた、どちらに言ったのかわからないのに」

青い男の子が次の日空き家の前を通りかかると、赤い女の子は屋根へのぼって空を見ました。

女の子は男の子に気がつくと、昨日のことなどなかったように、にこりと笑いかけました。

「空を見ているの」

聞かれてもいないのに、女の子はそう一人ごとのように呟きます。

「空って、いろんな色があって、本当綺麗なのよ」

男の子に話しかけているのか、はたまた自分で自分に語りかけているのかわからない口調で、女の子は話します。

男の子は、ふと言葉をこぼしました。

「僕も、青色好き」

そう言ったのです。女の子が、にっこりと笑った。その時でした

「お前、そいつをかばうんだな」

冷たい冷たい、暗い声が響きました。

はつとして男の子がふり返ると、そこには友だちが——いいえ、今まで友だちだった子たちが立っていたのです。

「白以外を好きなんか」

男の子のまわりは、女の子をとり囲んでいた空気と同じ、暗く恐しいものになっています。

「今ならまだ、皆許してくれるよう」と、誰かが叫んでいます。

けれども、男の子は、今度は逃げません。

「青色が好きで、何が悪いの！」

もう誰も、味方はいません。女の子以外は。「僕は、もう自分に嘘をついてまで一緒にになりたくないよ」

目にいっぱい涙を溜めて、男の子はそう叫びました。

男の子は、だっと走り出しました。

誰の声も聞こえません。誰も、何も言ってくれませんでした。

その後、男の子と女の子を見た人は、誰もいませんでした。

男の子が走ってどこかへ行ってしまったあと、町の人々は顔を見合わせました。

どこかで、誰かが声を上げました。

——ほくも、本当は黄色が好きだ。

その声をはじめに、次々に声が上がります。そして、また誰かが声を上げました。

町を、いろんな色に塗ろう。

白ばかりじゃ、つまらない。

そうだそうだと、町の外から、たくさんの絵の具が持って来られます。町の人々は、町

を色とりどりに染めあげていきました。

青い男の子は、一人で町の外にいました。

さらり、と、風が吹くと、目の前にあの赤

い女の子が立っていました。

「きみは」

女の子はくすくすと笑います。

「わたしは、あの町に〈色〉を届けに来たのよ」

男の子はきよとんと女の子を見ます。

「神様がせっかく授けてくれた〈色〉を使わないなんて、もったいないわ」

女の子は男の子に手をさし出します。男の

子が手を取り、立ち上がると、女の子は男の

子の町を指さしました。

男の子は、目を大きく見開きました。

「白い町が」

——そう、そこはもう、ただの白い町ではありませんでした。

花畑のように、赤やら青やら黄色やらが、

美しくおり重なった町が、そこにはあつたのです。

「あなたは、もう一人でかくす必要なんてないの」

なんとたつて、

「あなたのあの声で、町は変わったのだもの」

女の子の手をはなれ、青い男の子は自分の町へ走っていきます。

「自分の〈色〉は、大切にしないと」

女の子は、変わった町を、そして迎えに来た友だちと楽しそうに帰る男の子を、嬉しそうに眺めながらそう**さか**かきます。

そして。

赤い女の子は、まわりの色に溶けて消えていきました。

今度はもう、あの青い男の子でさえ、赤い女の子を見ることは、二度とありませんでした。

平成30年度 人権問題文芸作品

『のじぎく文芸賞』

発行 平成30年12月
編集 公益財団法人兵庫県人権啓発協会

〒650-0003

神戸市中央区山本通4丁目22番15号
兵庫県立のじぎく会館内

TEL 078 (242) 5355

FAX 078 (242) 5360

発行者 兵庫県 公益財団法人兵庫県人権啓発協会

印刷 (株)興正社

